

第2節 旧石器時代の調査

1 概要

下甲退休原第1遺跡では旧石器時代の文化層を2つ確認した。発掘調査で確認できた県内で最初の旧石器時代の重層遺跡ということになる。

下層では、始良丹沢火山灰(AT)層下約5cmの、白色ローム層中から、46点の石器が出土した。旧石器は3つのブロックを形成し、その中には2点の台形石器が含まれる。出土層準と内容からみて、現在までのところ県内最古の石器群である。

上層では、ソフトローム層の最上部を中心に漸移層にかけて46点の石器が出土した。石器は斜面に広く分布し、原位置は保っていないが、内容等から同時期のものであることに疑いはない。30点の小石刃は多くが折り取って使用されており、斜めに折って槍先に利用した可能性があるものが含まれる。類例が乏しい石器群であり、ナイフ形石器文化と細石刃文化をつなぐ可能性があるものとして重要である。旧石器時代終末期の遺跡の発掘調査としては、県内初例となる。

どちらの石器群も内容的には県内で初めて確認されたものである。豊成叶林遺跡や殿河内ウルミ谷遺跡などと合わせて、この地域における旧石器文化の編年を行う上での基準資料と評価される。

2 調査の方法

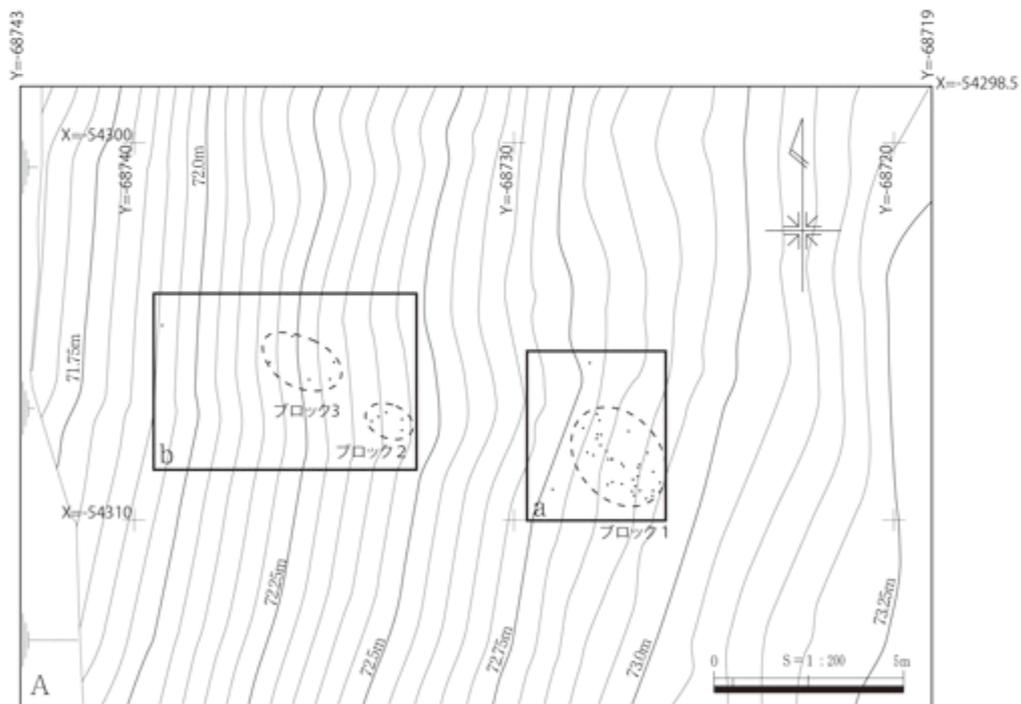
本遺跡での旧石器調査は、大きく分けて上層(A区)と下層(B区)の2段階でおこなった。

最初に旧石器の可能性のある遺物が出土したのは、A区の斜面地の漸移層中からで、二次的に移動したものであると考えられた。そこで旧石器を調査するにあたっては、石器の出土層準を確定してその状況を記録するため、土層観察用のベルトを多く設定することとした。まず、出土地点の周辺から、移植ゴテ等を用いながら、石器を動かさないように慎重に掘り下げ、石器が見つかり、写真撮影などで記録を取り、周辺に調査範囲を広げた。最終的に谷部と周辺の斜面地はすべて、上層の出土層準よりかなり下のAT下位の白色ローム中まで調査をおこなった。ところで、石器は谷部の斜面地から出土したため、当初は丘陵上に遺跡の本体が存在することが想定された。そこで、より上方の斜面地や丘陵上にも、上層の旧石器の調査と同時進行で、トレンチを掘削した。トレンチは豊成叶林遺跡や門前第2遺跡における出土層準を参考に、AT下位5cmの深さを目安とした。その結果新たな石器群の発見はなかったが、遺跡全体の基本層序が確認できた。また、大規模な旧石器時代遺跡ではないという結論に達した。

下層の旧石器は、調査の最終盤に最終的な確認トレンチを入れた際に発見された。そこで、A区と

表3 旧石器概要表

	台形石器 (g)	微細剥離ある小石刃 (g)	小石刃 (g)	石刃 (g)	剥片 (g)	二次加工片 (g)	碎片 (g)	計(g)
下層	2				21	10	13	46
	(1.47)				(10.76)	(0.85)	(0.68)	(13.76)
上層		16	14		15		1	46
		(6.40)	(5.87)		(11.24)		(0.04)	(23.55)
不明(後世包含層)				1				1
				(1.83)				(1.83)
計	2	16	14	1	36	10	14	93
	(1.47)	(6.40)	(5.87)	(1.83)	(22.00)	(0.85)	(0.72)	(39.14)



第11図 下層石器出土状況

同様の方法でベルトを残しながら、丘陵上の全体と、丘陵肩部については傾斜変換点まで掘り下げを行った。予想に反して、下層の石器は丘陵上ではなく斜面部に散漫に分布することが確認されたので、適宜調査範囲を広げ、最終的には石器の分布が途切れた約5m先のA区との境界近くまで掘削して調査を終了した。

なお下層の調査時点でA区は引渡しが進んで建設工事が開始されていたが、主要な部分については上層の調査と同時進行でトレンチ調査を実施しており、白色ローム中にも石器群はないとの結論を得ていた。

3 下層(第11~25図、PL.39・40)

(1)概要

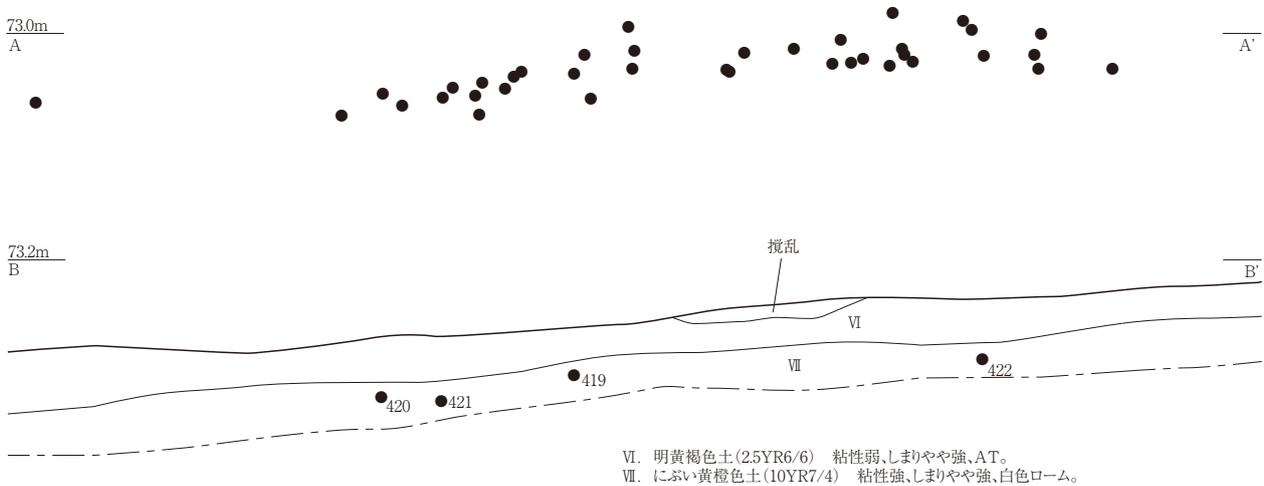
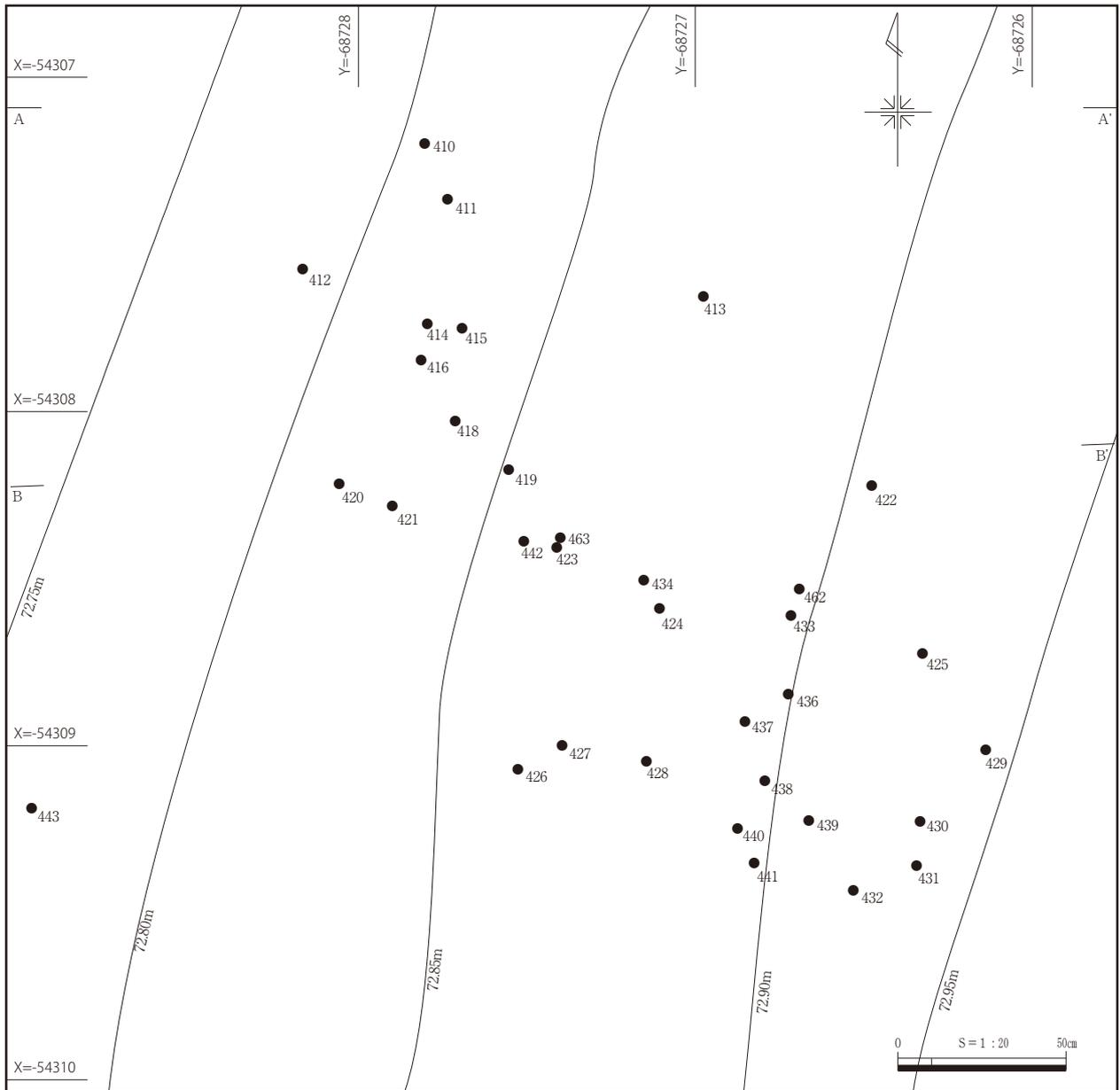
調査地の中央東寄り、南から北に向けて緩やかに下る尾根の西側緩斜面上で、石器は大きく3箇所に分かれて分布する。尾根の近くでは、35点の石器がまとまっている(ブロック1)。ブロック1から約5m西に離れて、0.9×0.5mの範囲から5点の石器が出土した(ブロック2)。さらにブロック2から1.5m北西を起点に、5点の石器が1.8×1.0mの範囲で斜面上に散漫に分布する。本来はブロック2と一体であったものが斜面に流出した可能性があるが、ブロック2とは間隔があることと、分布と内容にまとまりがあることからブロック3と捉える。いずれのブロックも斜面上に位置し、近接する遺物でも5cm程度の高低差を示すものがあることから、厳密に原位置にはない。しかし、石器型式および母岩別の分布状況から、ある程度は位置と関係を保っていると考えてよい。

出土した旧石器は3ブロック合わせても46点と非常に少ない。内容的にも貧弱で、ツールは2点の台形石器のみで、残りは小型の剥片と碎片ばかりで石核は存在しない。しかしながら、この貧弱さこそが、この時期の日常的な石器製作と生活の一端を物語るものと考えられる。7組の接合資料があり、うち1つは台形石器を含む7点からなるもので、その製作過程がわかる。石英1点以外はすべて黒曜石を石材とする。

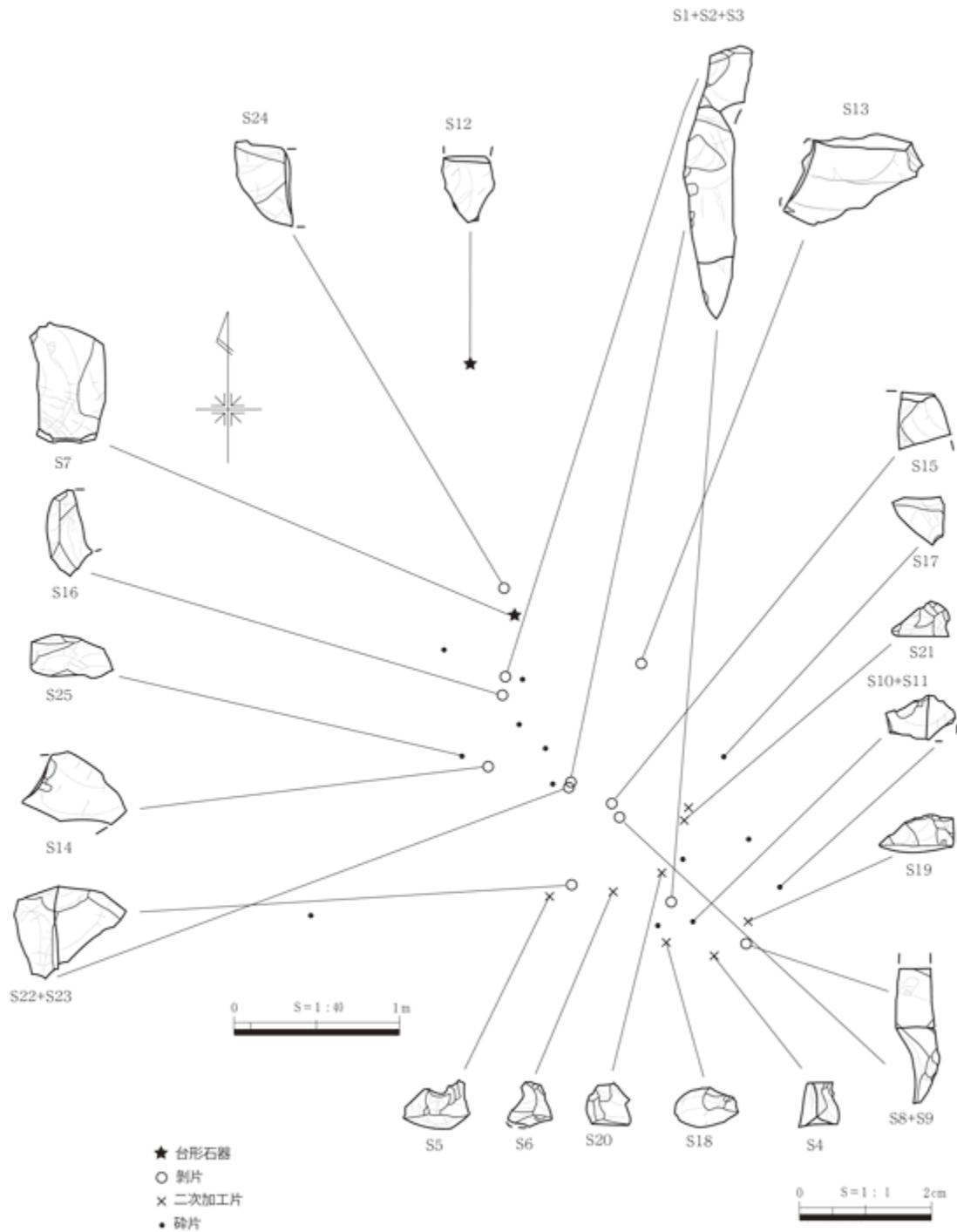
石器が出土した層準は、3ブロックとも同様である。10~15cmの厚さをもつAT層下の、白色ローム層中、ATとの境から約5cmの深さを中心に石器は出土する。白色ロームが赤みを帯び始めるあたりである。ところで、本遺跡の西方3kmに所在する豊成叶林遺跡や西方7kmの門前第2遺跡は同様の

表4 下層母岩別表

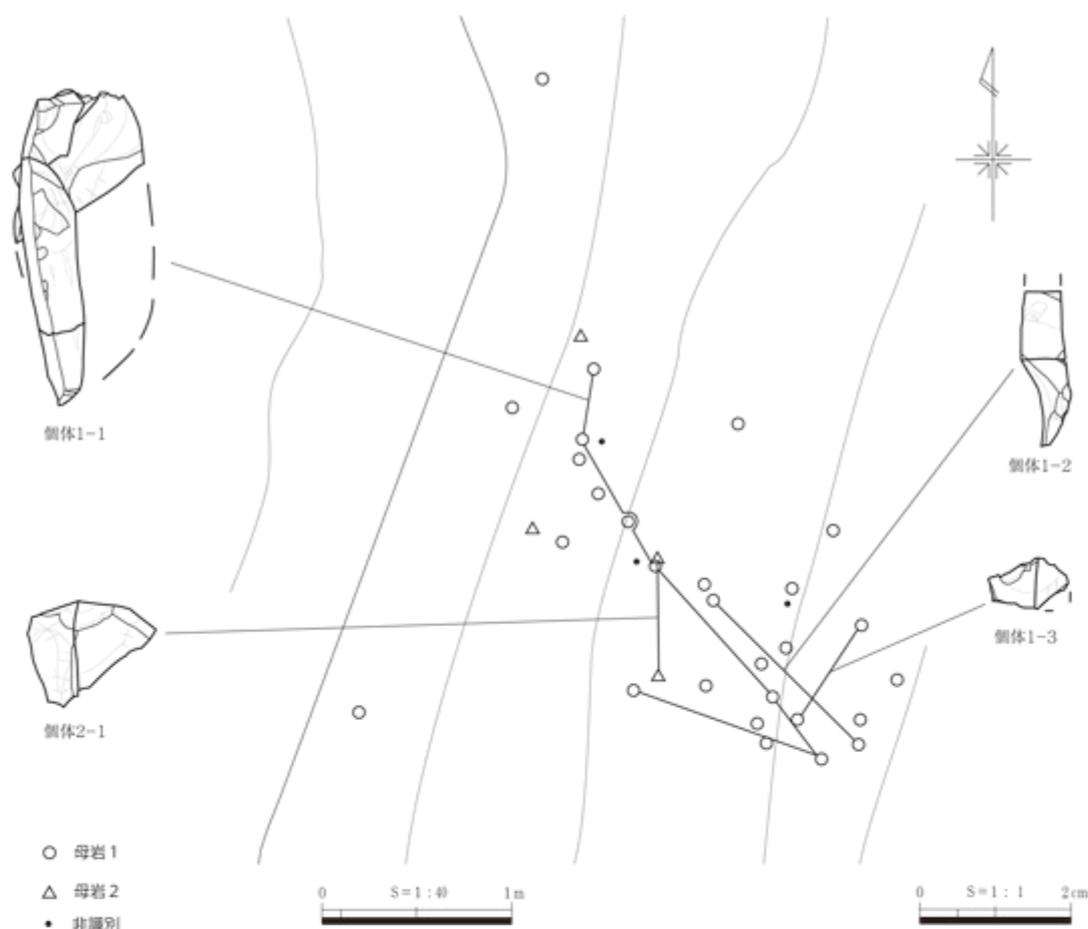
		台形石器 (g)	剥片 (g)	二次加工片 (g)	碎片 (g)	計 (g)	母岩計 (g)	ブロック計 (g)
ブロック1	母岩1	2 (1.47)	9 (2.69)	9 (0.80)	9 (0.33)	29 (5.29)	29 (5.29)	35 (6.36)
	不明			1 (0.05)	1 (0.00)	2 (0.05)	2 (0.05)	
	母岩2		3 (0.82)		1 (0.20)	4 (1.02)	11 (5.66)	
ブロック2	母岩2		3 (3.96)		2 (0.15)	5 (4.11)		5 (4.11)
ブロック3	母岩2		2 (0.53)			2 (0.53)	3 (1.48)	5 (2.01)
	母岩3		3 (1.48)			3 (1.48)		
ブロック外	石英		1 (1.28)			1 (1.28)	1 (1.28)	1 (1.28)
計		2 (1.47)	21 (10.76)	10 (0.85)	13 (0.68)	46 (13.76)	46 (13.76)	46 (13.76)



第12図 下層ブロック1 石器出土状況



第13図 下層ブロック1型式別石器分布図



第14図 下層ブロック1母岩別石器分布図

堆積環境にあり、AT下約1～2cmの深さでまとまってナイフ形石器を中心とする旧石器が出土している。豊成叶林遺跡では、ブロックに伴う炭化物集中から約30000年前という暦年較正年代が得られていて、これまでは県内最古の遺跡とされてきた。これらの遺跡の例と比較して、本石器群は明らかに深い層準で検出されており、台形石器を含むことから、現在までのところ県内で最も古いものと認識される。

ブロック1とブロック2では、石器に混じって少量の炭化物が検出された。炭化物の分布は散漫で層準にもばらつきがあり、分布範囲が石器よりもかなり広いことから、調査の時点において、石器群に伴うものではないと判断した。念のため3点ずつを放射性炭素年代測定したところ、暦年較正年代で29280～30470 calBC(ブロック1)、29146～29726 calBC(ブロック2)という結果であった。出土層準や台形石器をもつ他遺跡との比較から、本石器群の年代は35000年前頃と推定されるが、炭化物はそれよりも若い年代であり、調査時に判断したとおり混入と考えてよさそうである。

(2) ブロック1

出土状況

I5グリッド南西部に位置し、標高は72.75～72.95mを測る。3.0×1.5mの長楕円形の範囲に33点の石器が集中する。1.4m北方から出土した石器の破片1点と1.3m南西から出土した破片1点も便宜上このブロックに含める。ブロックは南に下る尾根の西側斜面付近にあり、地形は東南から北西にむ

けて緩やかに下るものの、ブロック内では傾斜は顕著ではない。

第12図の土層断面図に示すとおり、石器は概ねATと白色ロームの境界から4～5cmの深さで出土した。しかし、AT直下やその近くで検出した石器も少なからずあり、垂直方向に5cm程度までの移動は認められる。したがって完全には原位置を保っていないと考えられる。

組成

ブロック1から出土した遺物の内訳は、表4のとおりである。

石器は台形石器2点で、1点は折れて基部のみが残る。剥片は12点あるがいずれも小さく、剥離時に割れたり折れたりしている。また、横形の不定形なものが多い。比較的大きな剥片に貝殻状を呈するものがあるので、多くは台形石器の素材として取られたものと推定される。石刃は含まれない。碎片には、少なくとも10点の二次加工片が存在し、うち3点は台形石器に接合する。

石材はすべて黒曜石で、2母岩が識別できる。識別可能な33点のうち29点は母岩1に、4点は母岩2に属し、母岩1が圧倒的である。母岩2はブロック2に由来するものなので、ブロック1では主に母岩1を割っていることになる。35点のうち11点が4組の接合資料を構成する。うち3組は剥片の剥離時の割れ面で接合したもので、残る1組は台形石器の素材の剥ぎ取りと二次加工に関するものである。接合率が低いのは、遺物が小さいことと、石核作業面の異なる部分から少しずつ剥片を剥ぎ取る作業経過に要因があると考えられる。ブロック2とは接合関係はないが、母岩2を共有する。ブロック3とは接合関係も母岩の共有関係も認められない。

構造

ブロック1は、視覚的には北半と南半の2部分に分けることができる。石器型式別の分布(第13図)を見ると、北半は比較的大きめの剥片で構成され、台形石器もここに含まれる。碎片も一定量含まれることを考慮すると、有用そうな剥片を取りまとめただけでなく剥離作業も付近で行われていると推定される。一方、南半はほぼ碎片や小さな剥片のみで構成される。特に二次加工片の分布は南半に限られるので、台形石器の仕上げはこの部分で行われたと考えられる。個体1-1では、台形石器素材に先行して取られ剥離時に折れた剥片と、完成した台形石器は北半にあるので、北半で素材の剥離を行った後で、二次加工は南半で行い、完成した石器は再び北半に持ち出されていると考えられる。

母岩別の分布(第14図)を見ると、母岩2の剥片は主に北半に存在する。したがってブロック1のこの部分こそが、他のブロックからのものも含めて、完成した石器や大きめの剥片が集められる遺跡の中心的な機能を担った場所であると考えられる。

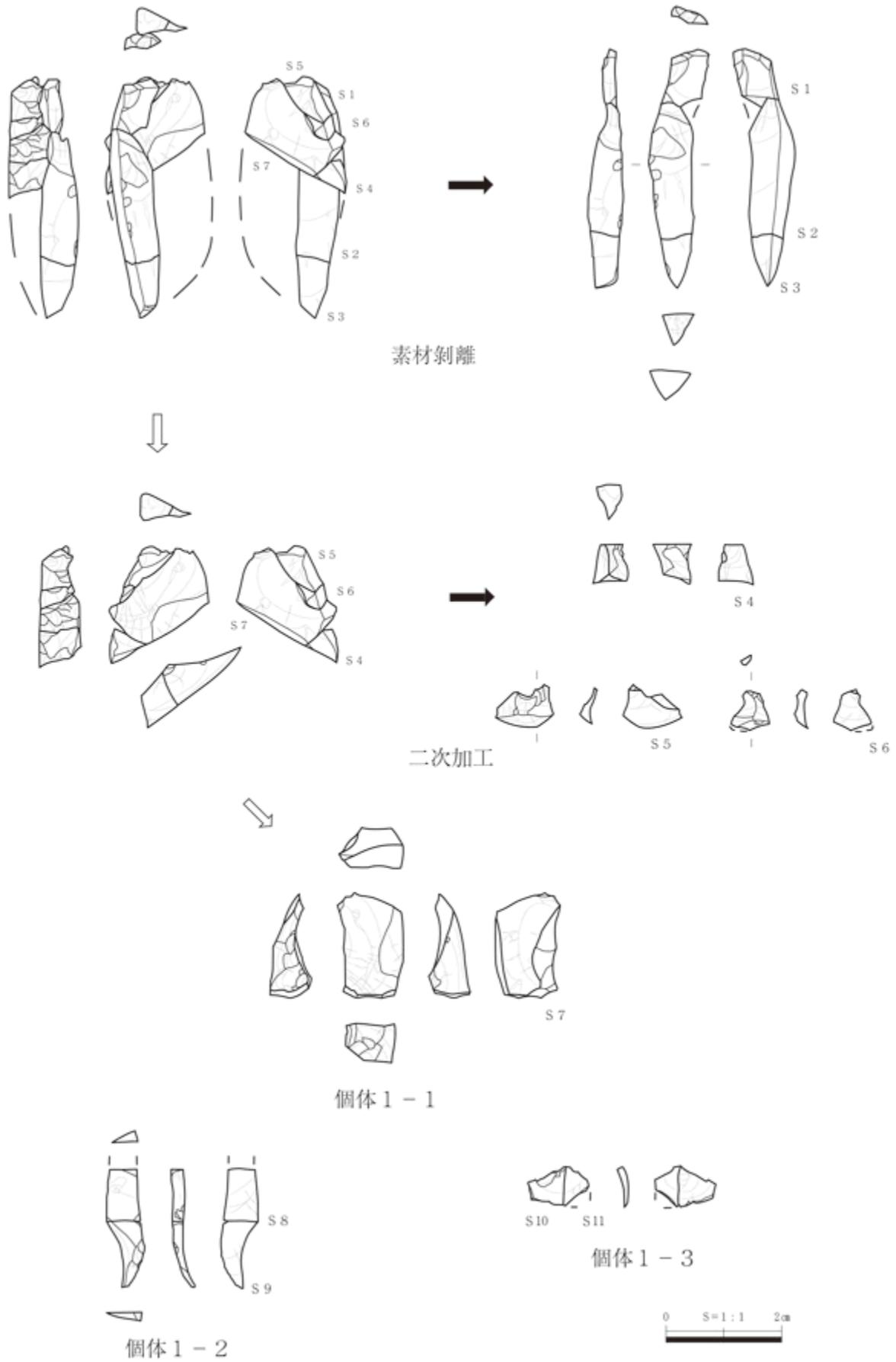
出土遺物

母岩1(第15図、PL.39・40)

半透明でわずかに縞模様をもつ黒色の黒曜石。概してやや肌理がざらつくが、同じ接合資料の中でも部位によってはガラス質の強い部分がある。良質。29点がこの母岩に属する。

接合資料

個体1-1は、台形石器を含む7点の接合資料である。



第15図 下層ブロック1母岩1

まず、長さ4cm程度、幅2cm以上の石核から、台形石器の素材となる、縦長で横断面直角三角形の剥片を剥離する。石核縁部を中心とした剥片2枚分の接合資料のため、作業の全体像を把握することは難しいが、直方体の縁を削ぎ落とすように剥片が取られているようである。石核の縁部で、側面よりも作業面側を多く取り込むようにすることで鋭い刃縁を獲得していると考えられる。側面にも幅2.7cmの大きな剥離痕が残っていることから、石核縁部からも作業面側を打面として先行して剥片の剥離が行われ、その後に作業面から長軸方向で剥片が取られていることがわかる。石核縁部に複数の微細剥離が認められるので、ここまでの作業は遺跡外で行われ、石核は相当の距離を持ち運ばれていると推定される。

ブロック1での作業では、まず礫面を打面として、側面と作業面の角近くに打点を選ばれる。しかし、打点が浅かったため剥離が石核縁部の稜に沿って進み、細長い剥片が取れただけに終わる。この剥片は剥離時に3つに折れて廃棄される(S1～S3)。次の打撃はより大きな剥片が取れるようにも少し打面深くを叩く。この間打面調整や頭部調整などの石核調整は行われていない。すでに縁部が削ぎ落とされていることもあって、片方の側縁が鋭縁でもう一方が側面をもつ大きくて良好な剥片が取れる。しかし、この剥片は挟雑物のために惜しくも2つに折れてしまう。

剥片のうち、打面側の破片は台形石器に二次加工される。わずかに残った素材剥片の鋭縁を刃部に見立て、反対側の、素材の折れ面と側面によってできた突出部を正方向のリタッチで除去した後(S4)、素材打面部と側面の角を反方向のリタッチで除去して(S5・S6)、長方形の台形石器に整形する。背部に対向方向の剥離面が認められることから考えて、この二次加工は台(石?)上での挟み撃ちによって行われている。残る1辺は素材の折れ面をそのまま充て手を加えない。台形石器S7は、遺跡外に持ち出されていないことから、使用せずに廃棄されたようである。上記のような経過で製作された結果、基部が厚くなってしまったからであろう。基部を薄くする平坦調整が見られないことから、台形石器としては古い形態に属すると考えられる。

末端側の破片は、鋭く長い刃をもつより良好な素材であったはずである(点線部)。母岩1には台形石器S7には接合しない二次加工片が複数存在する(S18～S20)。それらの中には、末端側の破片を台形石器に仕上げた時に出たものが含まれている可能性があり、これが正しければ完成した石器は持ち出されていることになる。

この例からは、台形石器製作において、素材剥片の剥離に石核縁部を利用して剥片を取る手法が存在することや、その手法に内在する欠点(縁部を細く取り込みやすい点)、二次加工における素材の使い方が場当たりのことであることがわかる。

個体1-2(S8・S9)は、薄く細長い剥片が折れたもののうち2点が接合したもの。側面を持ち横断面直角三角形となる点など、個体1-1から読み取れる剥片剥離作業に共通する部分がある。あるいは同じ石核の反対側の側面から取られたものであるかもしれない。S1～S3のように剥離が縁部に抜けて失敗したものか、付随的に取れたものと考えられる。個体1-2の背面の剥離面構成が末端側からなることは、個体1-1で見られるような剥離経過に180度の打面転移が伴う場合があることを示唆する。

個体1-3(S10・S11)は、碎片が垂直割れしたもの。二次加工ではなく目的剥片の剥離に由来するものである。

非接合資料(第16図、PL.40)

S12は石器の破片で横形剥片を素材とする。台形石器の基部と思われるが、刃部にあたる部分を欠損するため不確かである。台形石器としては細長く、尖った基部をもつ。他の剥片と接合せず、この石器に由来すると考えられる二次加工片も見当たらない。ブロック1から離れて出土したことを考え合わせると、ここで作られたものではなく、石器の状態で搬入されたものが破損のために、ブロック1で作られた台形石器と交換されて廃棄されたものかもしれない。

S13～S17は剥片。いずれも剥離時に割れたり折れたりしている。S13のような横形剥片はS12のような台形石器の素材として取られたものと考えられる。S12～S14から、剥片あるいは分割礫を素材に両面がポジ面や平坦面で構成される貝殻状の横形剥片を取る手法も、個体1-1のような石核縁部を中心に剥片を取る手法とは別に存在したと考えられる。出土した剥片から見る限り、この手法でも打面調整などの石核調整はあまり行われないうである。

S18～S21はブランディングチップ。S18は素材の主剥離面側か両ポジの素材から取られたもの。S19は礫打面なので礫面をもつ素材から取られたと考えられる。

母岩1には石核が存在しない。作業の進んだ石核と2～3枚の剥片を持ち込んで、それぞれから数枚の剥片を剥ぎ取り、数本の台形石器を製作して、石核は持ち出したものと推定される。このようなきわめて限定的で慎ましい石材消費の在り方が、本石器群における石器製作の大きな特徴のひとつである。

母岩2(第16図、PL.40)

透明度に乏しく青みを帯びた黒曜石。風化が著しい。ブロック2を構成する母岩で、ブロック1には4点存在する。

S22～S23は垂直割れした横形剥片が接合したもの。背面の剥離面構成や打面部の形状などから考えると、円盤状石核から取られている可能性がある。細かな打面調整は行わないが打面がカーブを描いて膨らんだ箇所を狙っている。S24は垂直割れした横形剥片。S25は反転によって厚く取れてしまった碎片。通常このような事故的な剥片の存在は、そこで剥離作業が行われた証拠と考えるべきものだが、石器も剥片も小さい本石器群においては、素材の候補や便宜的な道具として扱われる場合があったのかもしれない。

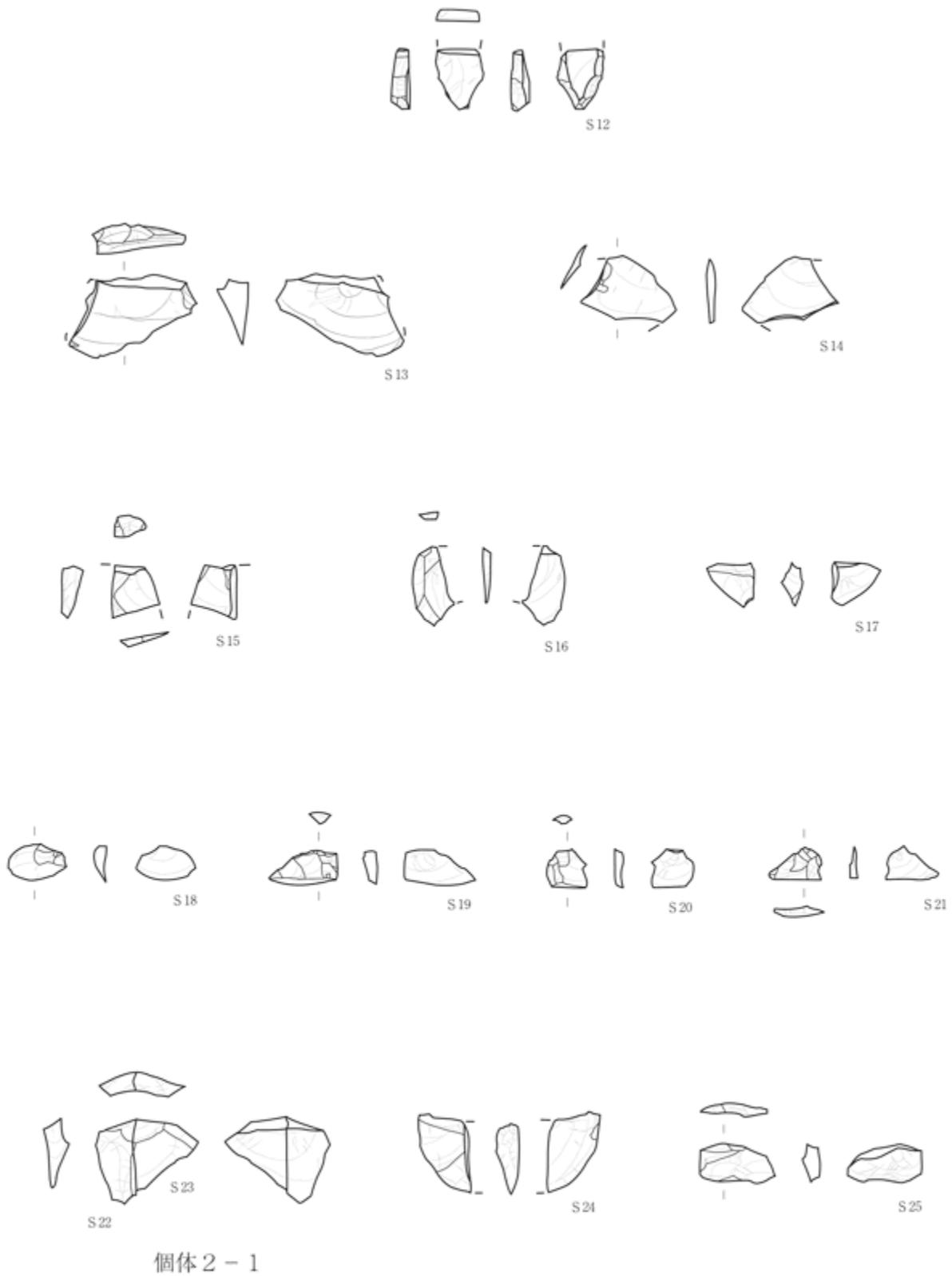
(3) ブロック2(第17～19図、PL.40)

出土状況

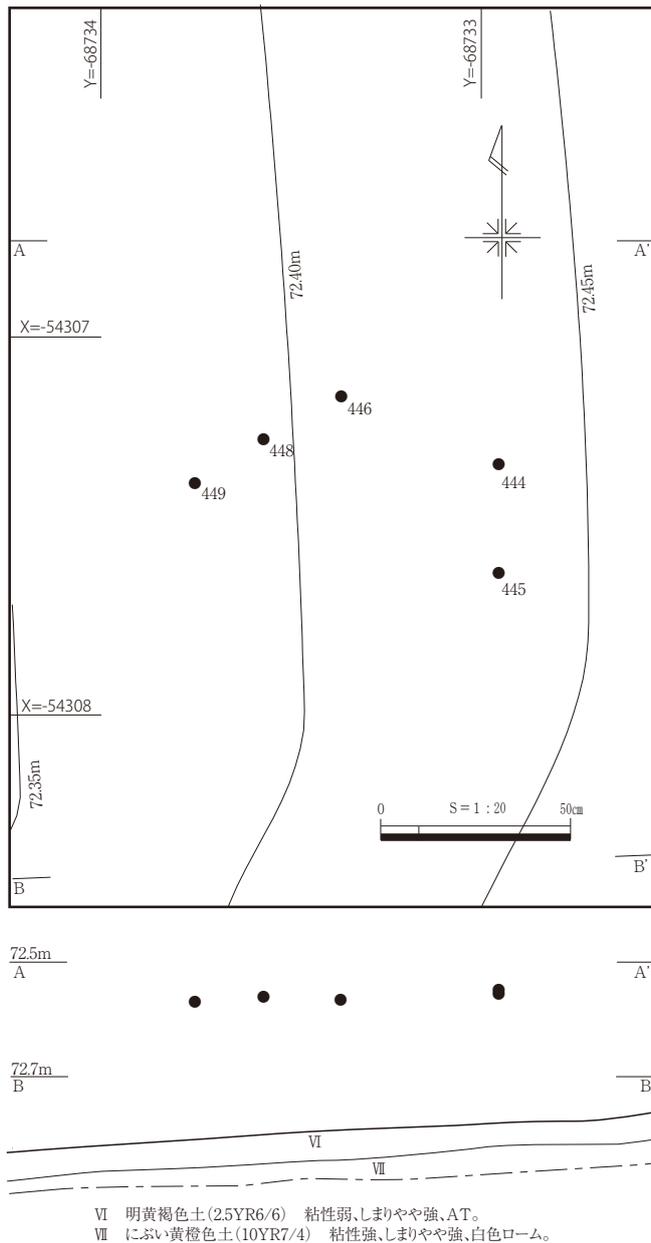
ブロック1の西約5mの、西向きの緩斜面上に位置する。標高は72.4mを測り、狭いこともあってブロック内では概ね平坦である。0.9×0.5mの範囲に5点の石器が分布するだけの小さなブロックである。出土層準はほぼ揃っており、ブロック1のような垂直方向のばらつきは認められない。

組成

ブロック2から出土した遺物の組成は表4のとおりで、3点の剥片と2点の碎片からなる。すべて黒曜石で、同一母岩(母岩2)に属し、2組の接合資料がある。剥片は、本石器群としては大きい部類になる。ブロック1には母岩2の剥片が4点存在する一方で、ブロック1の主体である母岩1はブロック2には存在しない。また、ブロック3には2点の母岩2の剥片があるが、母岩3はブロック3



第16図 下層ブロック1母岩1非接合資料、母岩2



第17図 下層ブロック2石器出土状況

によるもの。

S 30は、石核の打面縁部から取れた碎片。

(4) ブロック3 (第18・19・21図、PL.40)

出土状況

ブロック2の北西約1.5mの、西向き緩斜面上に所在し、標高は72.2~72.4mを測る。1.8×1.0mの範囲に5点の剥片が分布する。出土層準は他のブロック同様AT下数cmの白色ローム中である。斜面地であるため、遺物は動いている可能性があるが、遺物相互の距離と内容的なまとまりから、ブロック2とは別のものと捉える。

にしかない。つまり、他のブロックに一方的に剥片を提供する存在である。

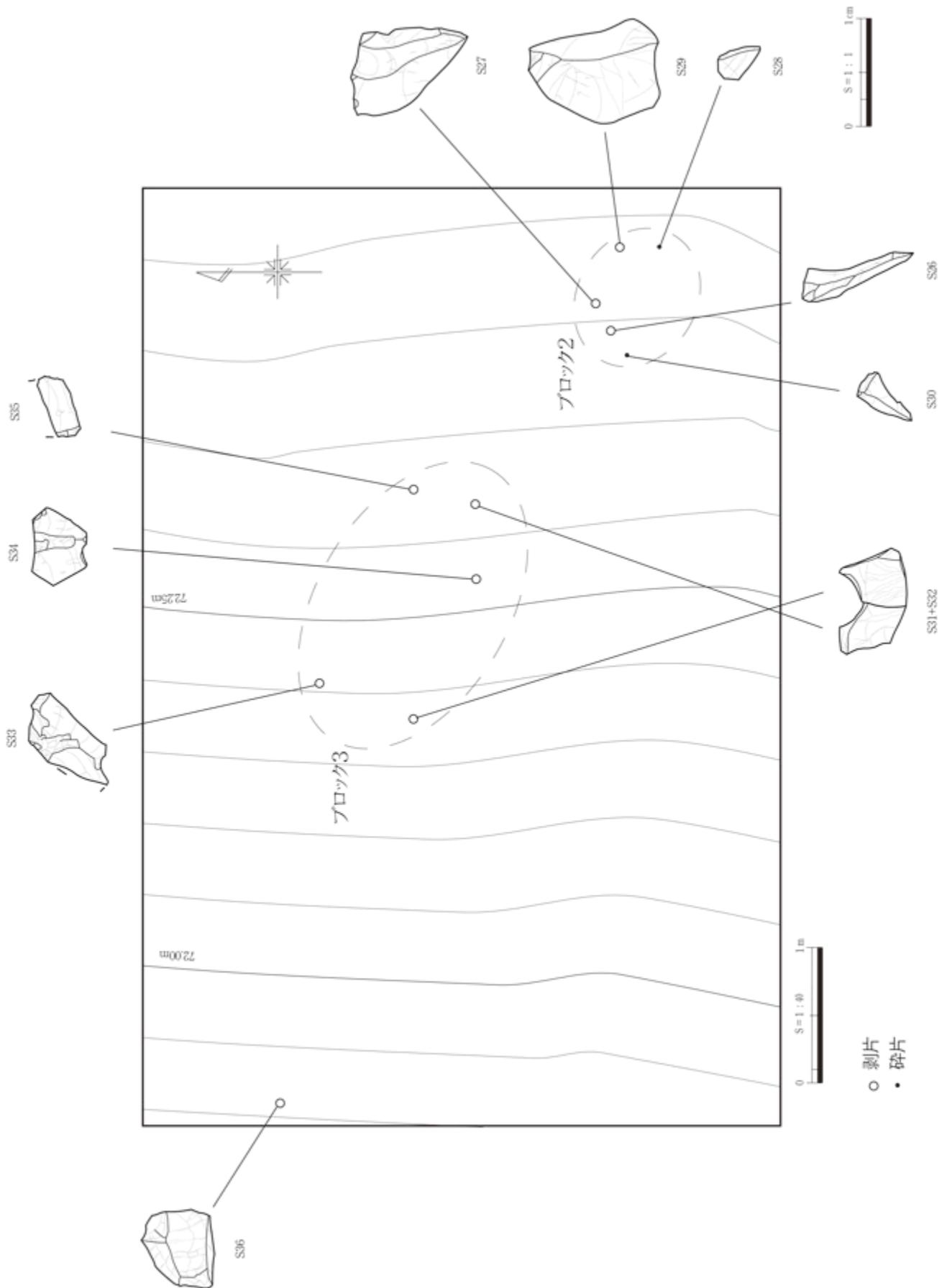
出土遺物

母岩2 (第20図、PL.40)

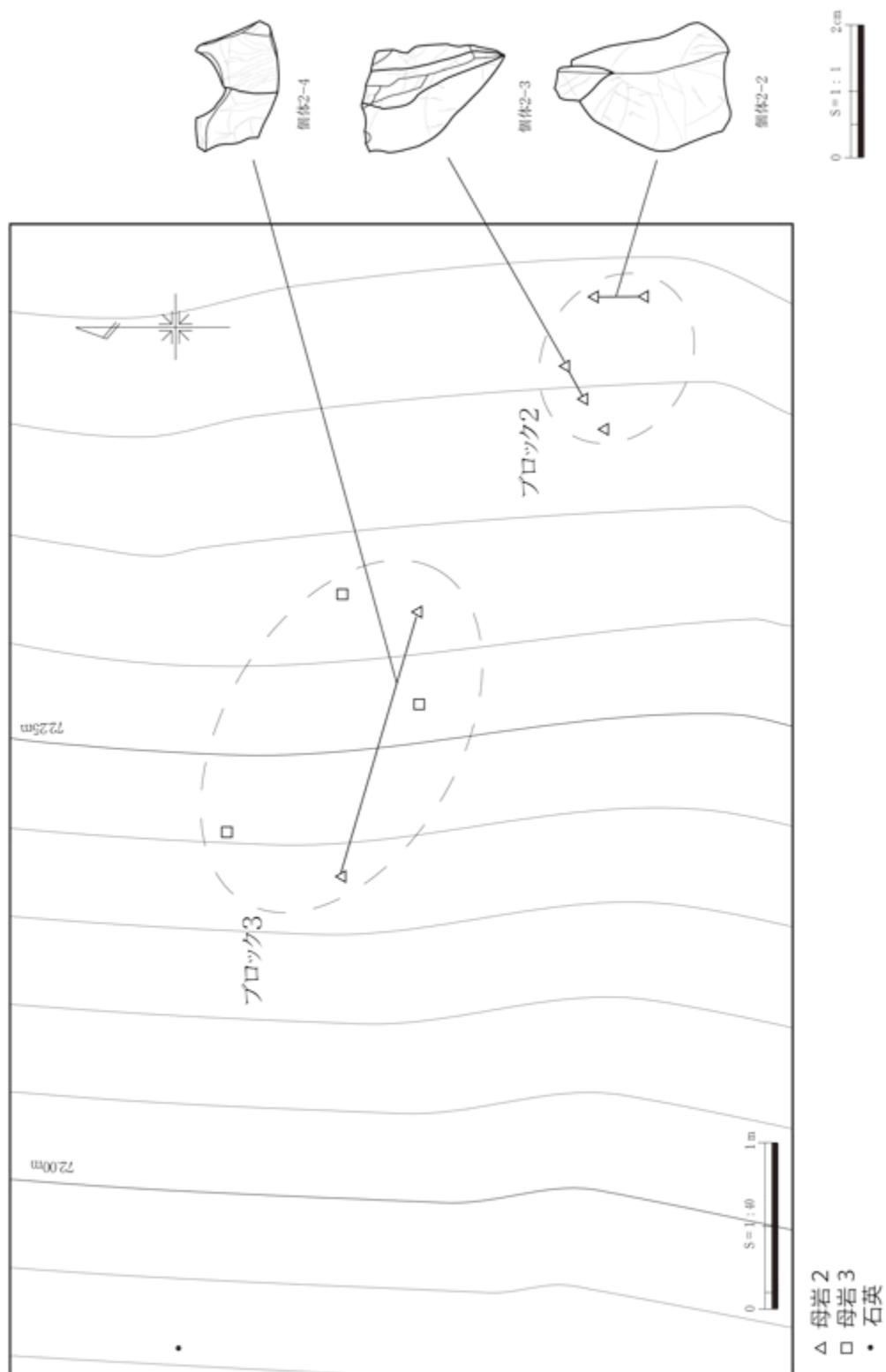
透明度の低い青みがかった黒曜石。風化してざらついている。

個体2-1は剥片2点の接合例である。S 26は稜線を取り込む薄く細長い剥片で、S 27は分厚く主剥離面が波打つ剥片。もう少し薄い剥片を意図したものが予定より奥から剥離が始まってしまったものと思われる。S 27は意図的なものというより、ハンマーが打面縁部と接触することによってS 27の剥離に付随して取れたものの可能性がある。打面転移を頻繁に行う小型の石核から取られたものであることが、背面の剥離面からわかる。

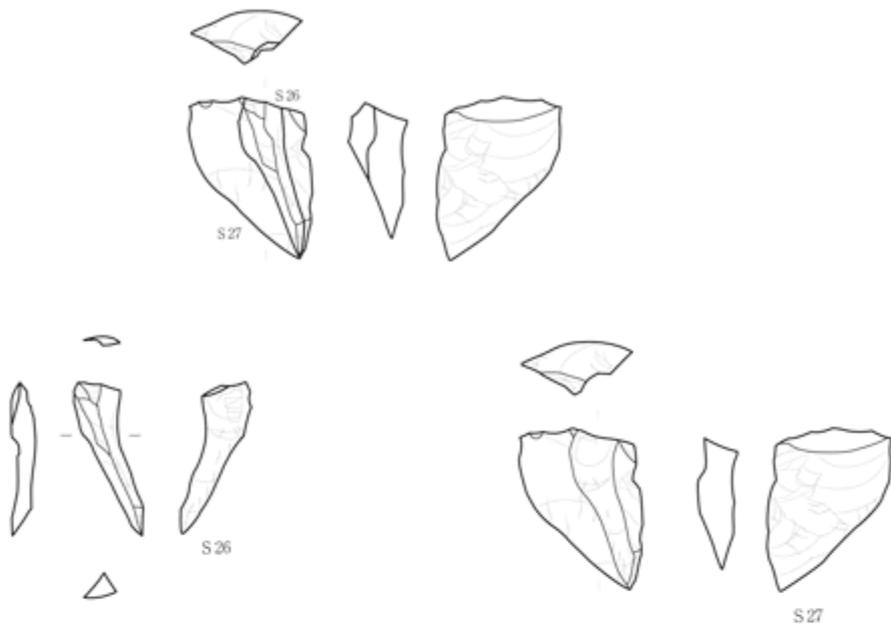
個体2-2は剥片と碎片の接合例。大きな剥片を石核素材とし、その打瘤部を、素材主剥離面と素材打面のなす稜線を利用して、横方向からの打撃で取り込み、大半が両ボジとなる剥片を剥ぐ。この割り方は、個体1-1に見られるような、石核縁部を中心に作業して横断面直角三角形の剥片を剥ぐ手法に共通する。S 29は比較的良好な剥片で、目的とされた剥片の特徴をよく示している。S 28は付随的に取れたものか、チップング



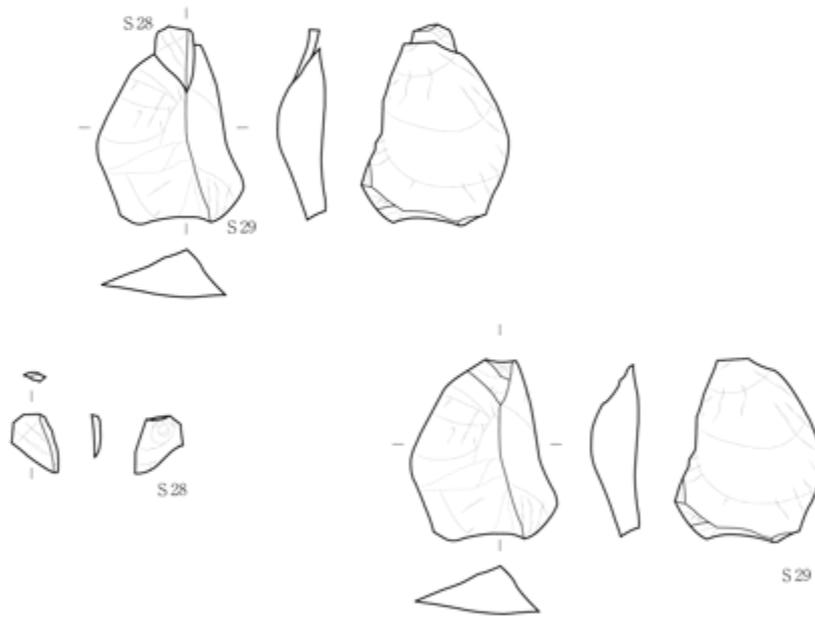
第18図 下層ブロック2・3型式別石器分布図



第19図 下層ブロック2・3母岩別石器分布図



個体 2 - 2

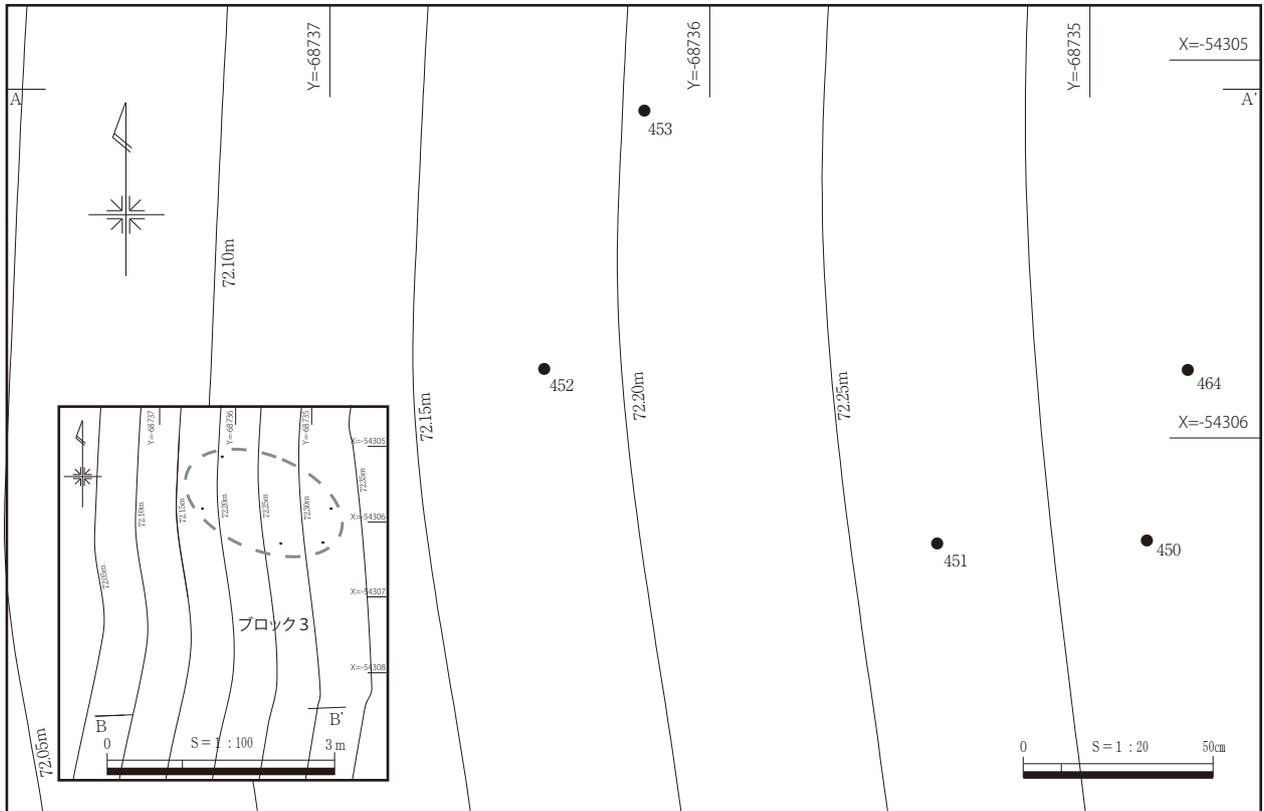


個体 2 - 3



第20図 下層ブロック2母岩2

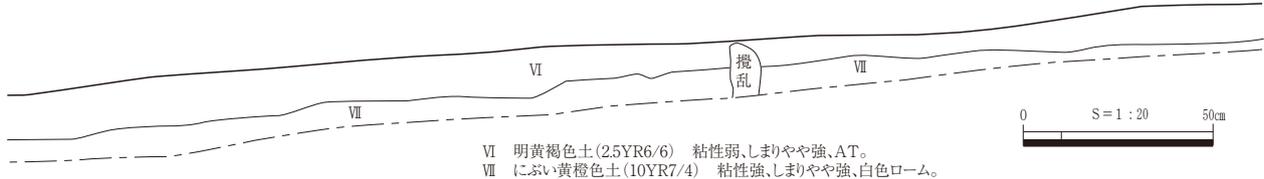
第3章 調査の成果



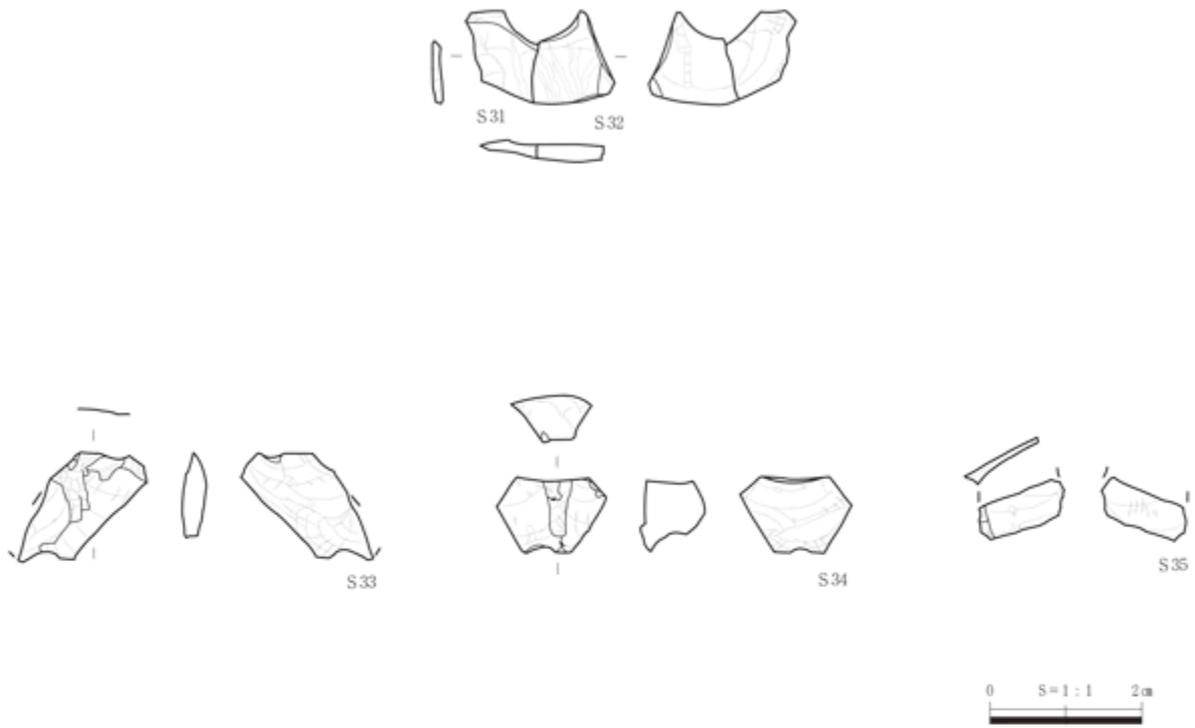
72.5m
A



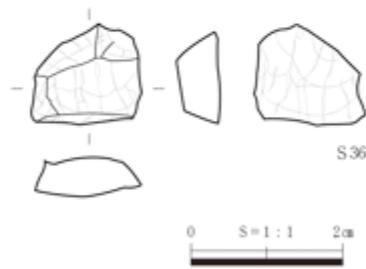
72.6m
B



第21図 下層ブロック3石器出土状況



第22図 下層ブロック3母岩2・3出土遺物



第23図 下層ブロック外出土遺物

第3章 調査の成果

組成

表4に示すとおり、剥片5点で構成される。うち2点は母岩2に、3点は母岩3に属する。母岩2の2点は接合する。いずれの剥片も折れなどの欠点をもつので、剥離後に廃物として棄てられたものであろう。ブロック2とは母岩2を共有していることになるが、ブロック1とは接合関係や母岩の共有関係をもたない。

出土遺物

母岩2 (第22図、PL.40)

薄い剥片が折れたもののうち2片が接合している(S31、S32)。一見大きな剥片を取った際の付随剥片のように見えるが、背面の剥離面が末端側からのもので構成されることから、意図的な剥離が失敗したものと考えられる。

母岩3 (第22図、PL.40)

黒みの強い黒曜石で、密度が小さく軽い。小さな挟雑物を含み、やや質が劣る。

S33は剥片で、背面構成は収斂方向になる。S34は石核縁部の破片。作業面中の稜線を取り込む剥片を狙って打撃を与えたものが、挟雑物のために打点の奥から割れが始まり、かつ反転して石核の縁部を損なったもの。S35は剥片末端部が折れたもの。

(5) ブロック外の出土遺物(第23図、PL.40)

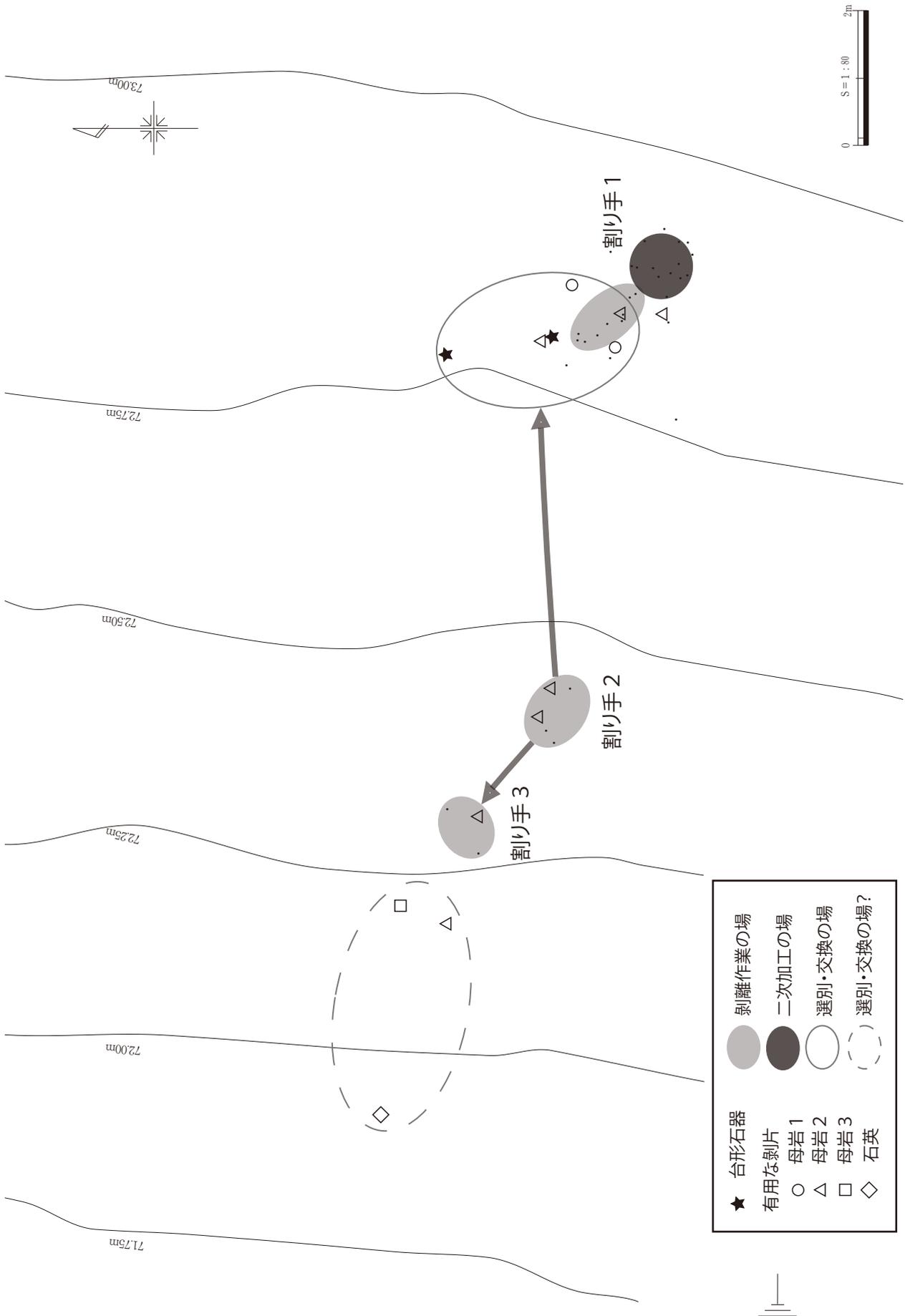
ブロック3の西北西約3m、標高約72.05mの地点から石英製剥片が1点出土している(S36)。横形剥片で、底面をもつ石核から主に単方向の剥離で取られたもの。右側縁のみが鋭縁である。大きさと形態から考えて、台形石器の素材である可能性がある。本石器群において黒曜石ではない石材を用いる唯一の遺物である。欠点はなく、碎片が出土していないので、遺跡外で剥離されて持ち込まれたものと考えられる。

(6) まとめ

以上から、各ブロックで行われた作業の内容を推定してまとめてみると、以下のようになる。

ブロック1では、母岩1から作った2～3個の石核から、それぞれ1～2枚の台形石器の素材となる剥片を取っている。石核は作業が進んだ状態のものと、素材剥片かそれに近い状態のものが持ち込まれ、石核素材の製作は遺跡内では行われていない。剥離した剥片は石核調整があまり行われないこともあってほとんど折れてしまっているが、その中から使える部分を選んで、2個程度の台形石器を製作する。1個は出来が良くないので使わずに棄て、1個を破損したものと交換して持ち出す。石核もすべて作業途中の状態を持ち出す。

ブロック2では、少なくとも母岩2の2つの石核から1枚ずつの剥片が剥ぎ取られる。石核はブロック1同様作業が進んだものと素材剥片に近いもので、やはり遺跡外で分割されている。ブロック1に3枚分、ブロック3に1枚分の剥片が行くので、石核は作業が進んだ状態のものがもう1～2個あったかもしれない。剥片から台形石器への二次加工は行われていない。石核はすべて作業途中で持ち出される。



第24図 下層の遺跡構造

第3章 調査の成果

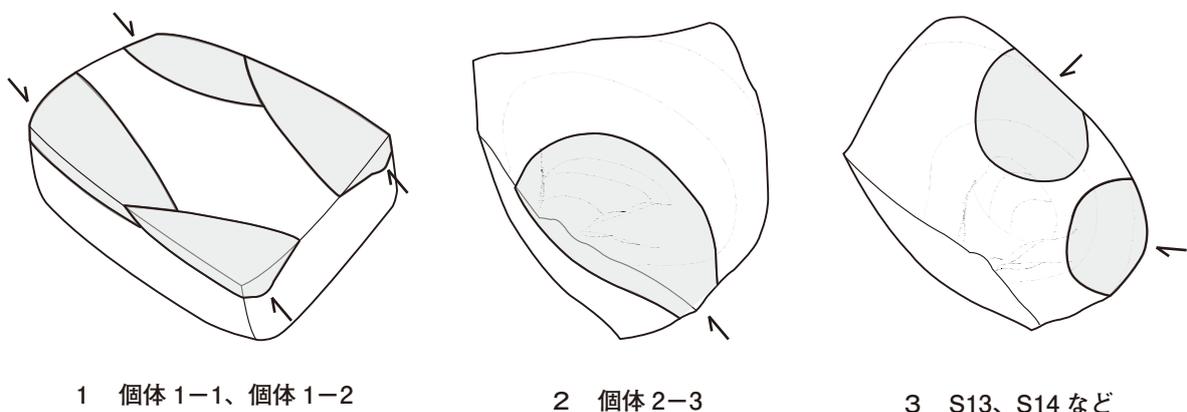
ブロック3では、母岩3から3枚の剥片を剥ぐがいずれも失敗している。石核は作業が進んだもの1つと考えられ、作業途中で持ち出される。石英の剥片が1枚搬入されて棄てられている。

3つのブロックは、それぞれが別の石を割るので、3人の人間が遺したものと考えられる。また、全てのブロックで作業途中の石核を搬入し搬出していることは、母岩の消費が遺跡外と連鎖していることを示す。おそらく石材の管理は個々人に任されているであろう。ブロック1の割り手がこの遺跡では主な業者であるが、石核の数や生産物の質からみて、ブロック2の割り手との技量差はあまりない。むしろ他の2ブロックに剥片を提供する点から考えると、ブロック2の割り手の方が格上の可能性がある。ただ、提供といっても割れた剥片ばかりなので、それぞれの場所で1～2枚の剥片を取って見せたと考える方が適当かもしれない。これに対し、ブロック3の割り手は技量が劣りそうである。3人の割り手が、ごく少数の剥片の剥離と台形石器の製作を行ったというのが、この遺跡で行われた作業である。

本石器群の例からは、後期旧石器時代初期における石材の消費形態がわかる。それは、作業の進んだ石核を各人が数個持ち歩き、それぞれから1～2枚ずつ剥片を剥離するだけという、抑制的で、ある意味で計画的なものである。その目的は、石材が枯渇するリスクを回避することにあると推定される。背景には割り手たちを取り巻いていた2つの状況が主に関係しているであろう。

1つは、黒曜石原産地との距離である。本遺跡から隠岐までは直線距離で約90kmあり、石材の補充は容易ではない。石英の剥片が1枚出土していることから、在地石材の利用も試みられてはいるようだが、専ら黒曜石に依存している以上、黒曜石の計画的な消費は不可欠であったはずである。

もう1つは、剥片剥離における技術的な制限である。本石器群では大きく分けて3種類の手法が復元できるが、いずれにも欠陥が内在する(第25図)。1つ目の手法は、直方体の石核の縁を中心に剥片を取るものであるが(第25図1)、細長くて薄い、台形石器には不向きな剥片が稜線に沿って取れる傾向がある。2つ目の手法は剥片を素材に両ポジの剥片を取るものである(第25図3)。剥片の末端が反転する傾向があり鋭縁を得るのが難しい。また、取ることができる剥片の数に限りがある。3つ目の手法は前二者の折衷的なものである(第25図2)。良好な剥片を取りやすいが、当然1枚か2枚しか取れない。いずれの手法でも打面調整などの石核調整はあまり施されない。これは、剥片の割れや折れの原因となる。特に、目的剥片の多くを占める横形剥片を取る際に、打面を凸状に整形しないことは、剥片の垂直割れを少なからず引き起こす。さらに、ほとんどの剥片が小さく、剥離時に折損している



第25図 台形石器素材の剥離手法

表5 下層石器一覧表

掲載 番号	ブロック	遺物 番号	挿図 番号	PL.	母岩	接合 番号	型式	部位	法量(mm)			重量 (g)	x座標	y座標	z座標	備考
									長	幅	厚					
S1	1	414	第15図	PL.39	1	1	剥片	p	10.0	8.4	2.5	0.18	-54307.730	-68727.806	72.868	
S2	1	423	第15図	PL.39	1	2	剥片	m	24.2	6.9	6.8	0.87	-54308.405	-68727.421	73.012	
S3	1	438	第15図	PL.39	1	3	剥片	d	9.7	4.7	5.1	0.20	-54309.101	-68726.810	72.932	
S4	1	432	第15図	PL.39	1	4	二次加工片	a	6.6	5.8	6.4	0.19	-54309.437	-68726.531	72.984	
S5	1	426	第15図	PL.39	1	5	二次加工片	a	7.5	10.0	4.1	0.17	-54309.066	-68727.547	72.929	
S6	1	428	第15図	PL.39	1	6	二次加工片	a	6.5	6.5	1.6	0.05	-54309.040	-68728.167	72.886	
S7	1	411	第15図	PL.39	1	7	台形石器	a	17.8	10.4	6.7	1.25	-54307.363	-68727.744	72.860	
S8	1	431	第15図	PL.39	1	1	剥片	m	9.8	5.3	2.3	0.11	-54309.360	-68726.362	72.923	
S9	1	424	第15図	PL.39	1	2	剥片	d	11.7	6.3	1.6	0.07	-54308.588	-68727.121	72.930	
S10	1	439	第15図	PL.39	1	1	碎片	l	6.1	6.1	1.4	0.04	-54309.225	-68726.684	72.924	
S11	1	425	第15図	PL.39	1	2	碎片	r	6.8	5.0	1.4	0.02	-54308.673	-68726.343	72.985	
S12	1	409	第16図	PL.39	1		台形石器?	b	9.3	7.6	3.0	0.22	-54305.842	-68727.999	72.809	上半欠
S13	1	413	第16図	PL.39	1		剥片	mr	13.6	19.7	4.8	0.76	-54307.652	-68726.989	72.968	
S14	1	421	第16図	PL.39	1		剥片	mr	10.0	15.0	1.5	0.19	-54308.283	-68727.915	72.807	
S15	1	434	第16図	PL.39	1		剥片	f	8.1	8.0	3.5	0.18	-54308.501	-68727.171	72.903	
S16	1	416	第16図	PL.39	1		剥片	l	13.5	6.6	2.1	0.13	-54307.845	-68727.827	72.839	
S17	1	422	第16図	PL.39	1		碎片	a	6.7	7.9	3.1	0.14	-54308.223	-68726.492	72.932	
S18	1	441	第16図	PL.39	1		二次加工片	a	6.0	9.0	1.8	0.09	-54309.349	-68726.738	72.915	
S19	1	430	第16図	PL.39	1		二次加工片	a	5.8	11.4	2.5	0.12	-54309.226	-68726.351	72.887	
S20	1	437	第16図	PL.39	1		二次加工片	a	6.5	6.9	2.0	0.08	-54308.925	-68726.875	72.978	
S21	1	433	第16図	PL.39	1		二次加工片	a	5.1	8.6	0.9	0.05	-54308.609	-68726.732	73.040	
S22	1	463	第16図	PL.39	2	1	剥片	l	14.0	6.0	3.3	0.22	-54308.377	-68727.417	72.895	
S23	1	427	第16図	PL.39	2	2	剥片	r	11.6	10.8	3.6	0.28	-54308.997	-68727.414	72.933	
S24	1	410	第16図	PL.39	2		剥片	l	12.9	8.2	3.4	0.32	-54307.196	-68727.812	72.787	
S25	1	420	第16図	PL.39	2		碎片	a	6.5	12.1	2.8	0.20	-54308.213	-68728.076	72.842	
	1	462			1		二次加工片	a	6.4	4.9	1.0	0.03	-54308.525	-68726.708	72.948	
	1	436			1		二次加工片	a	5.9	4.6	0.8	0.02	-54308.843	-68720.745	72.906	
	1	442					二次加工片	a	4.5	6.2	2.4	0.05	-54308.386	-68727.521	72.845	
	1	412			1		碎片	l	6.4	4.3	1.9	0.04	-54307.565	-68728.676	72.789	
	1	418			1		碎片	d	1.9	5.4	1.0	0.00	-54308.021	-68727.720	72.890	
	1	419			1		碎片	a	3.3	3.1	0.5	0.00	-54308.386	-68727.521	72.899	
	1	429			1		碎片	a	5.3	3.6	1.7	0.02	-54309.013	-68726.158	72.889	
	1	440			1		碎片	a	6.0	4.7	1.7	0.03	-54309.242	-68726.892	72.919	
	1	443			1		碎片	a	5.9	7.2	1.1	0.04	-54329.186	-68728.983	72.819	
	1	415					碎片	a	3.1	3.3	0.5	0.00	-54307.745	-68727.703	72.902	
S26	2	448	第20図	PL.40	2	1	剥片	a	18.7	8.6	3.1	0.22	-54307.275	-68733.936	72.412	
S27	2	446	第20図	PL.40	2	2	剥片	a	20.8	15.6	6.7	1.74	-54307.123	-68733.803	72.409	
S28	2	445	第20図	PL.40	2	1	碎片	a	7.7	5.8	1.1	0.05	-54307.625	-68733.309	72.420	
S29	2	444	第20図	PL.40	2	2	剥片	a	23.4	18.7	5.9	2.00	-54307.338	-68733.310	72.431	
S30	2	449	第20図	PL.40	2		碎片	a	10.8	8.2	3.1	0.10	-54307.390	-68734.106	72.396	
S31	3	450	第22図	PL.40	2	1	剥片	l	11.7	9.7	2.0	0.19	-54306.285	-68735.203	72.306	
S32	3	452	第22図	PL.40	2	2	剥片	r	12.9	10.7	2.7	0.34	-54305.818	-68756.181	72.205	
S33	3	453	第22図	PL.40	3		剥片	lm	13.8	18.1	3.1	0.47	-54305.137	-68736.181	72.236	
S34	3	451	第22図	PL.40	3		剥片	a	10.1	14.7	9.0	0.90	-54306.284	-68735.747	72.306	
S35	3	464	第22図	PL.40	3		剥片	d	8.9	11.4	1.7	0.11	-54305.825	-68735.091	72.314	
S36		457	第23図	PL.40			剥片	a	12.7	14.3	5.8	1.28	-54304.861	-68739.613	71.919	石英

凡例

部位 a:完全 p:打面部片 m:中央部片 d:末端部片 r:右片 l:左片 b:基部

第3章 調査の成果

ことは、石核固定技術の全般的な未熟さを物語る。個体1-1に見るように、台形石器は折れた剥片からも作ることができる。むしろ、大きさや形態的には、折れた剥片のほうが都合がよい場合が多いかもしれない。しかし、剥片の割れや折れは意図的には制御できない。また、剥離事故を許容する姿勢は、石核調整や固定技術の熟練を阻害し、かえって石材のロスを助長することになったであろう。このように、割り手たちが一定量の石材のロスを前提とした不安定な技術に基盤を置くことが、複数の石核を少しずつ割ってみるという場当たりの石材の消費形態をもたらしたものと推定される。

台形石器を組成する石器群としては、大規模な環状ブロック石器群が挙げられ、山陰地方では島根県奥出雲町原田遺跡の例がある。本遺跡の例は規模の点ではその対極にあたり、小さな1集団の瞬間的な活動の痕跡に過ぎない。しかしながら、大遺跡からは知ることが難しい最小の単位を捉えることができる点では、大きな価値をもつ。それは、環状ブロックを形成するような非日常的な活動とは対極にあって、はるかに多く繰り返されたであろう日常的な活動の姿と評価してよいものであり、そこからは、この時期の石器製作と石材消費における特徴をシンプルに理解することができる。さらに、この時期の遺跡といえば、ともすれば環状ブロックばかりに目が向けられがちであるが、本遺跡のようなスポット的な遺跡も数多く存在する可能性がある。集団の活動を研究するためには、スポット的な小遺跡にももっと光を当てる必要がある。

4 上層(第26~31図、PL.41)

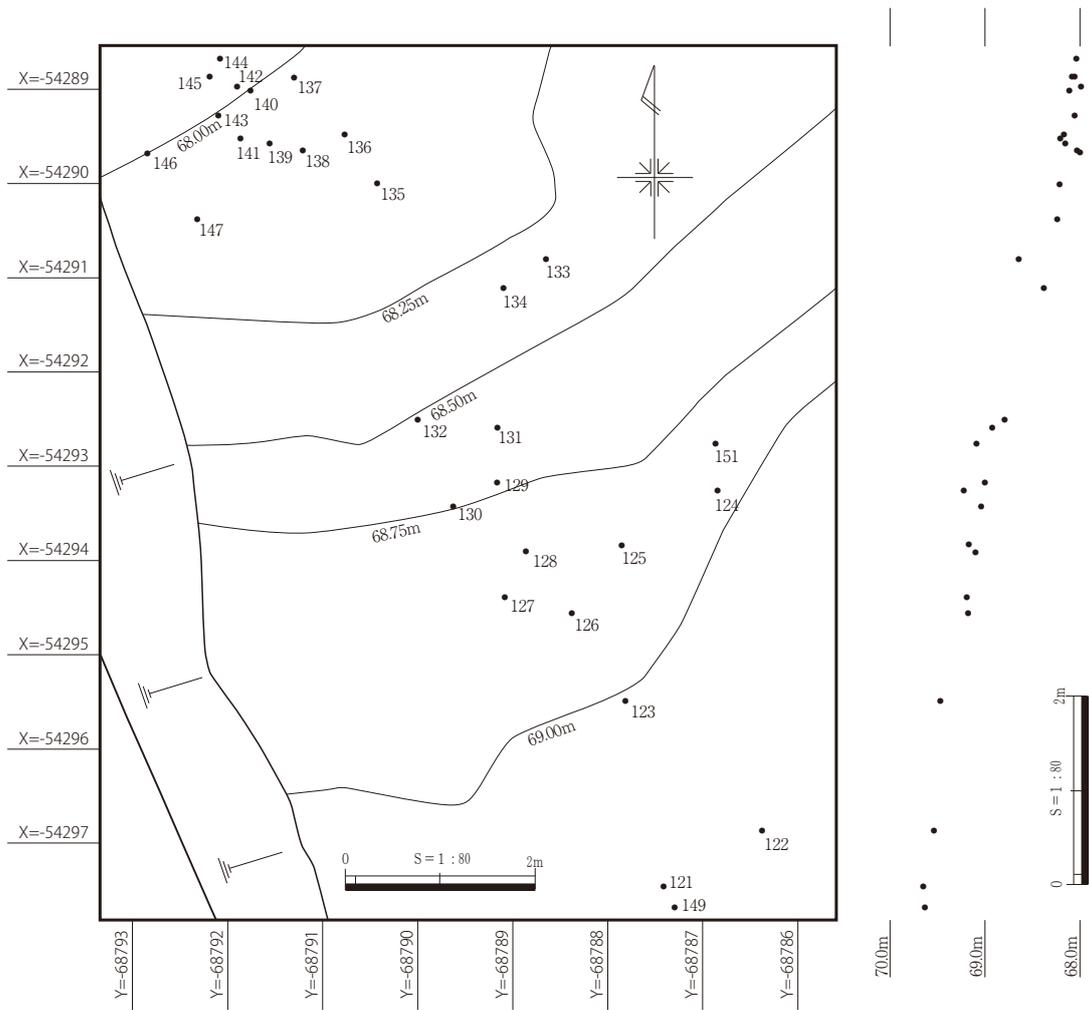
(1) 概要

上層の石器群が検出されたのは、調査地の北西隅、B4杭の付近を中心とした南北9m×東西7mほどの比較的広い範囲である。遺跡が所在する丘陵は幅約400mを測り、南から北に向けて緩やかに下ってゆく。ちょうど調査地付近において、丘陵上の中央から北西に向けて小さな谷が始まり、調査地外に出て約400mの距離を下って比高差約20mの丘陵の西裾に達する。石器が出土したのはこの谷が始まる部分で、いわば丘陵上への出入り口にあたる。石器は、谷底の傾斜地に沿って細長く分布し、標高は68.0~69.5mを測る。最も北で検出された遺物から調査範囲の境界まで約10mの空白地帯があるので、石器群の全体を調査したものと考えてよさそうである。

石器の分布を見ると、谷底側の分布の北西端では約2m四方の範囲に遺物が集中する。この部分では地形の傾斜は比較的緩やかである。石器には縁部の痛みが全く認められないので、斜面を流れたものが溜まったと考えるよりは、人為的なブロックと捉えるべきなのかもしれない。一方、斜面の上方には、7m×3mの帯状の範囲に散漫に石器が分布する。一見すると東南側から流れ込んだような分

表6 上層母岩別表

	母岩1 (g)	母岩2 (g)	母岩3 (g)	母岩4 (g)	母岩5 (g)	母岩6 (g)	母岩7 (g)	母岩8 (g)	母岩9 (g)	母岩10 (g)	母岩11 (g)	母岩12 (g)	母岩13 (g)	不明 (g)	計 (g)
小石刃(微)		2 (0.67)	3 (0.45)	3 (1.27)	2 (0.67)	2 (0.90)	2 (1.26)	1 (0.31)	1 (0.87)						16 (6.40)
小石刃	3 (1.54)	4 (0.81)	3 (1.94)		1 (0.55)			1 (0.05)	1 (0.59)		1 (0.39)				14 (5.87)
剥片	6 (6.41)	3 (1.04)	1 (0.19)	1 (0.10)						2 (1.13)		1 (1.30)	1 (1.07)		15 (11.24)
碎片														1 (0.04)	1 (0.04)
計	9 (7.95)	9 (2.52)	7 (2.58)	4 (1.37)	3 (1.22)	2 (0.90)	2 (1.26)	2 (0.36)	2 (1.46)	2 (1.13)	1 (0.39)	1 (1.30)	1 (1.07)	1 (0.04)	46 (23.55)



第26図 上層石器出土状況

第3章 調査の成果

布であるが、精査を実施したにもかかわらず東あるいは南側の丘陵上からは1点の石器も発見できなかった。また、ここの石器にも傷みはない。したがって、流れ込んだというよりは、本来斜面に残されたものと考えerほうがよいと思われる。斜面地であるので原位置は保たれていないであろうが、まともには失われていないであろう。

石器が出土したのは、丘陵上のロームや黒色土が谷部に流れ込んで形成された二次堆積層中である。しかし、二次堆積とはいっても、層序は乱れることなく丘陵上と同様に保たれ、丘陵上から連続する。Ⅲ層(黒色土)・Ⅳ層(漸移層)・Ⅴ層(ソフトローム)が石器を包含する層で、黒色土からは11点、漸移層からは19点、ソフトローム層からは10点が出土している。地形と堆積状況を考慮すると、石器群が本来包含されていたのはソフトローム層であると考えてよかろう。本遺跡ではソフトロームが厚く、肉眼で3層に分けることができる。石器が出土するのは最上部のⅤ-1層である。テフラ分析(第4章)によって、三瓶浮布テフラ(2.0~2.1万年前)の可能性があるものがソフトローム層中位から検出されていることから、本石器群の年代はそれ以降で縄文時代以前の、後期旧石器時代終末期と推定される。

(2) 出土遺物

上層から出土した石器は46点を数える。碎片1点以外の45点を第27~29図に図示する。

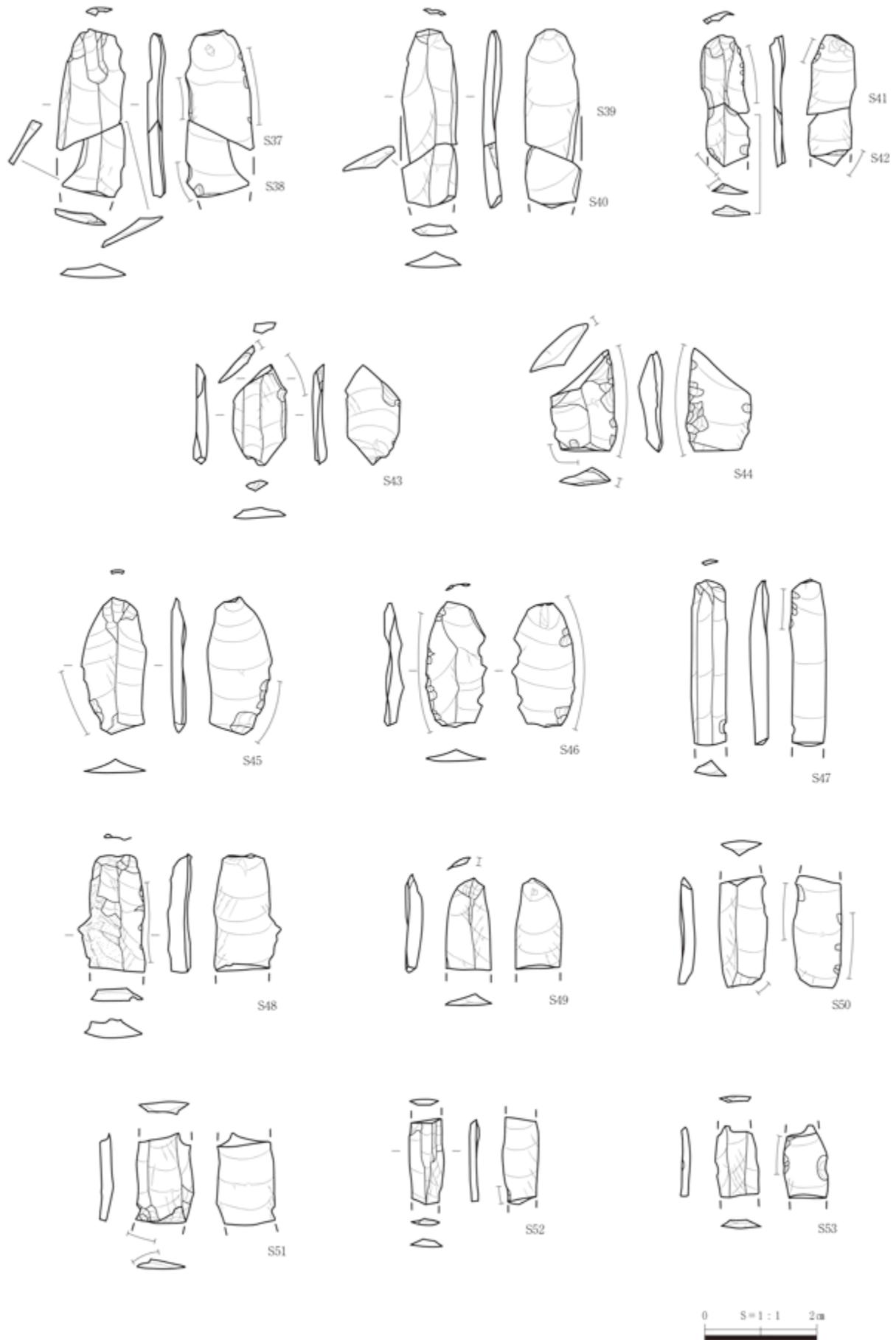
石材はすべて黒曜石を用い、少なくとも13母岩に識別できる。それぞれの構成資料数は少なく、最多の母岩1と母岩2でも9点ずつしかない。その一方、2点で構成されるものが5母岩、1点で構成されるものが3母岩ある。多数の石核から剥離された少数の小石刃や剥片が寄せ集められているというのが、上層石器群の大きな特徴である。

石器群の型式別の組成は非常に個性的である。定型的な石器が存在しない一方で、46点のうち30点(65.2%)は小石刃に分類される。なお、小石刃とは本遺跡の場合、幅5~15mmの石刃のことで、細石刃としては大きすぎ石刃としてはやや小さいものを対象とした、幾分便宜的な分類である。小石刃のうち半数以上の16点には、使用によるものと思われる微細剥離が認められる。完全な小石刃は4点に過ぎず、ほとんどが剥離後に意図的に折られている。折れ面で接合するものも3本分6点存在する。剥片は15点が出土している。大半は形態や剥離面構成から考えて小石刃と同じ作業面から取られたものと思われる。折れ面で接合したものが1組あるが、剥片どうしは接合しない。また、小さな小石刃の破片を検出できているにもかかわらず、碎片は1点しか出土していない。石核は存在しない。このような剥片や碎片などの組成から考えると、調査地内では小石刃の剥離作業はほとんど行われておらず、他の場所で剥離された小石刃が累積して、本遺跡に搬入されたものと推定される。

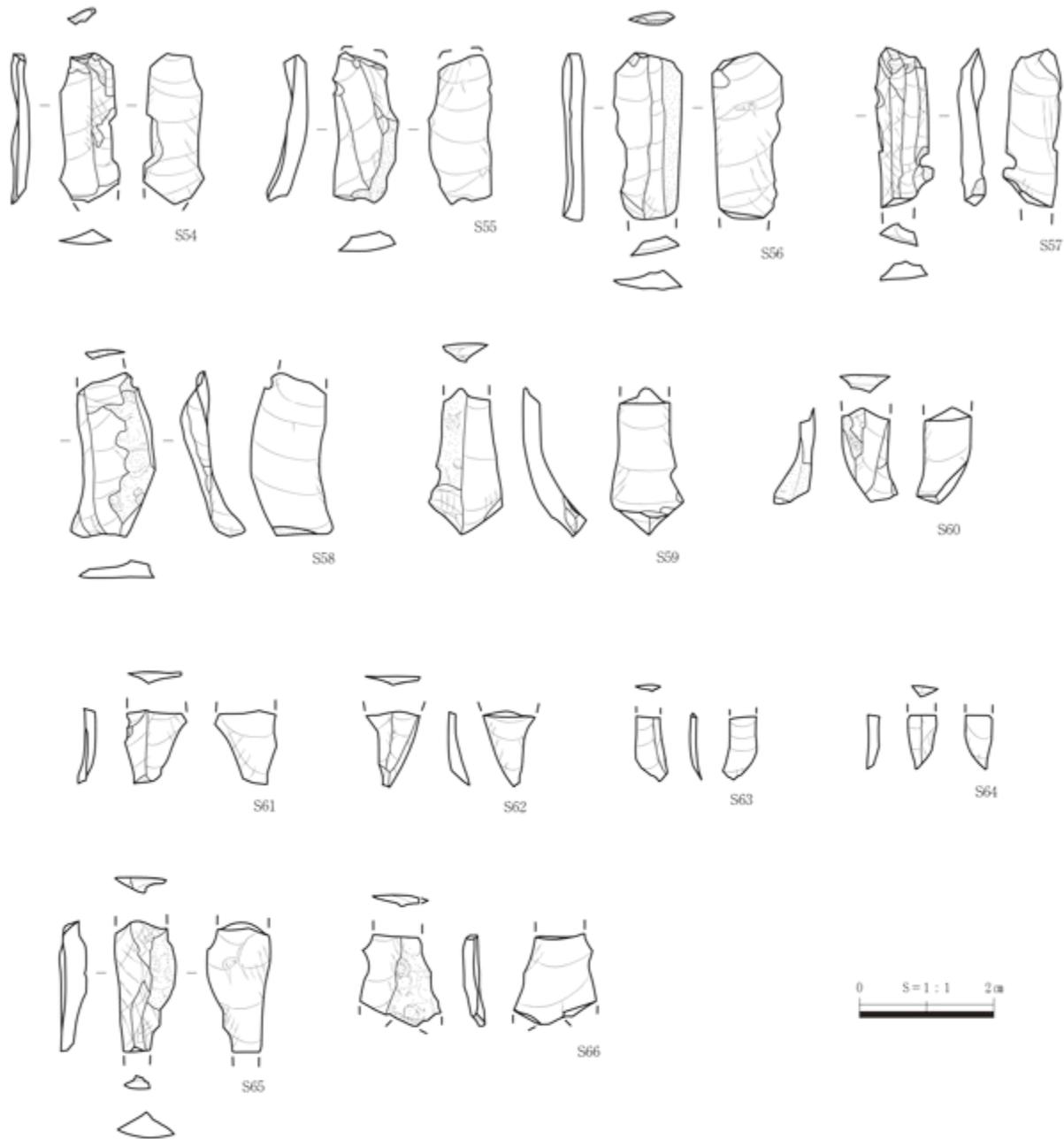
小石刃

小石刃のうち微細剥離をもつものを第27図に掲げる。製作実験の結果などから剥離時の偶発的な微細剥離と推定されるものについては除外した上で、以下の記述は微細剥離が使用の結果残された可能性があるという前提で進める。

小石刃の接合資料は3組あり、それぞれ別の母岩に属する。S37~S42はどれも頭部と中央部が折れ面で接合した資料である。いずれの折れ面も打点や対向するコーンを持たないことから、打撃によって折ったものではないであろう。平滑でリングに乱れが見られないことから、何かをあてがって



第27図 上層出土小石刃(1)



第28図 上層出土小石刃(2)

そこを支点に、反対側の支点から外れた場所から力を加えて折ったものと推定される。S39以外の破片には微細剝離が認められる。注目されるのは、3点とも中央部の小さな破片にも微細剝離があることである。微細剝離は折面と側縁との角にあり、S40では彫刀面状を呈する。後述するように、装着にかかわるものと考えられる。ごく小さな破片が目的的に折り取られて使用されていることがわかる。

S43とS44は一端が斜めに折られている例である。ともに折れ面上の先端部分に微細剝離があり、この部分が機能部である可能性を示す。S44では微細剝離は右側縁に集中するほか、基端側の両角にも認められる。これらは、定型的な石器をもたない本石器群において、目的とされた形態のひとつを示している可能性がある。ブランディングによる背部整形こそ施されないものの、平面形からは小型の幾何形ナイフ形石器との類似性が想起される。単独で槍先に用いるには小さいとするならば、組

み合わせ道具の先端に取り付けるピースと考えてもよいかもしれない。斜めに折り取られているS37も、この石器群では例外的に両側縁に微細剥離があることを考え合わせれば、同様に先端に用いられたものの可能性がある。

S45とS46は小石刃を折らずにそのまま使用している例で、長さが短く形態が寸詰まりであることが関係しているであろう。いずれも左側縁の両面に比較的深い微細剥離をもつ。一方、S47は最も細長く整った例である。末端部のみを折り取っている。S48とS49も末端部を折る例で、S49は頭部に斜めに彫刀面状の微細剥離があり、S43やS44と同じような使用方法を推定できるかもしれない。S50は微細剥離をもつものとしては唯一の末端部側破片である。末端部でありながら屈曲は弱い。S51～S53は中央部片で、1つの角に微細剥離がある点は、S38やS40などと共通する特徴である。これら中央部片は、組み合わせ道具の側縁のピースとして装着されたものであろうか。

第28図は小石刃で、微細剥離を持たないものである。S54とS55は発掘時に損傷したがもとは完形だったもので、折らずに用いられたS45やS46に大きさが近い。S56とS57は末端部を折るもので、刃縁は整っている。以上は使用可能なものと考えていいだろう。微細剥離は使用の結果必ずしもできるものではないことを考慮すると、これらも使われているかもしれない。一方、S58は石核の末端と側面を取り込んだ上に屈曲しており、出来はよくない。折れも剥離時と考えられる。

S59～S64は末端部片で、特にS59とS60は、剥離が行き過ぎて石核末端を取り込んで屈曲している。末端部に、先行する小石刃の剥離痕が複数認められ、その配置から石核が、楔形などではなく円錐形で、全周を作業するものであったことがわかる。また、S61～S64からは小石刃の末端が先細りであったことがわかる。円錐形石核から小石刃を連続剥離するためには、末端は先細りでなければならず、かつ小石刃は末端付近で屈曲することになる。軸に装着するためや、複数を組み合わせて用いるには、刃縁は直線的であることが望ましいので、末端部は除去する必要がある。出土した末端部にはいずれも微細剥離が認められないので、廃物であると考えられる。廃物である末端部が調査地内に残されているということは、遺跡内で、搬入された複数の小石刃を折り取る作業が行われたことを意味する。その作業は、末端部が多く検出された谷の上方で行われたと考えられる。一方、3点の小石刃接合資料がすべて末端部を欠いていることは、これらについては、末端部の折り取りと、おそらく頭部と中央部への分割も、この遺跡に来る前に行われたことを示唆する。以上から、装着した状態で搬入した小石刃を、新たに本遺跡内で末端部を折り取ったものと交換したのではないかと思われる。

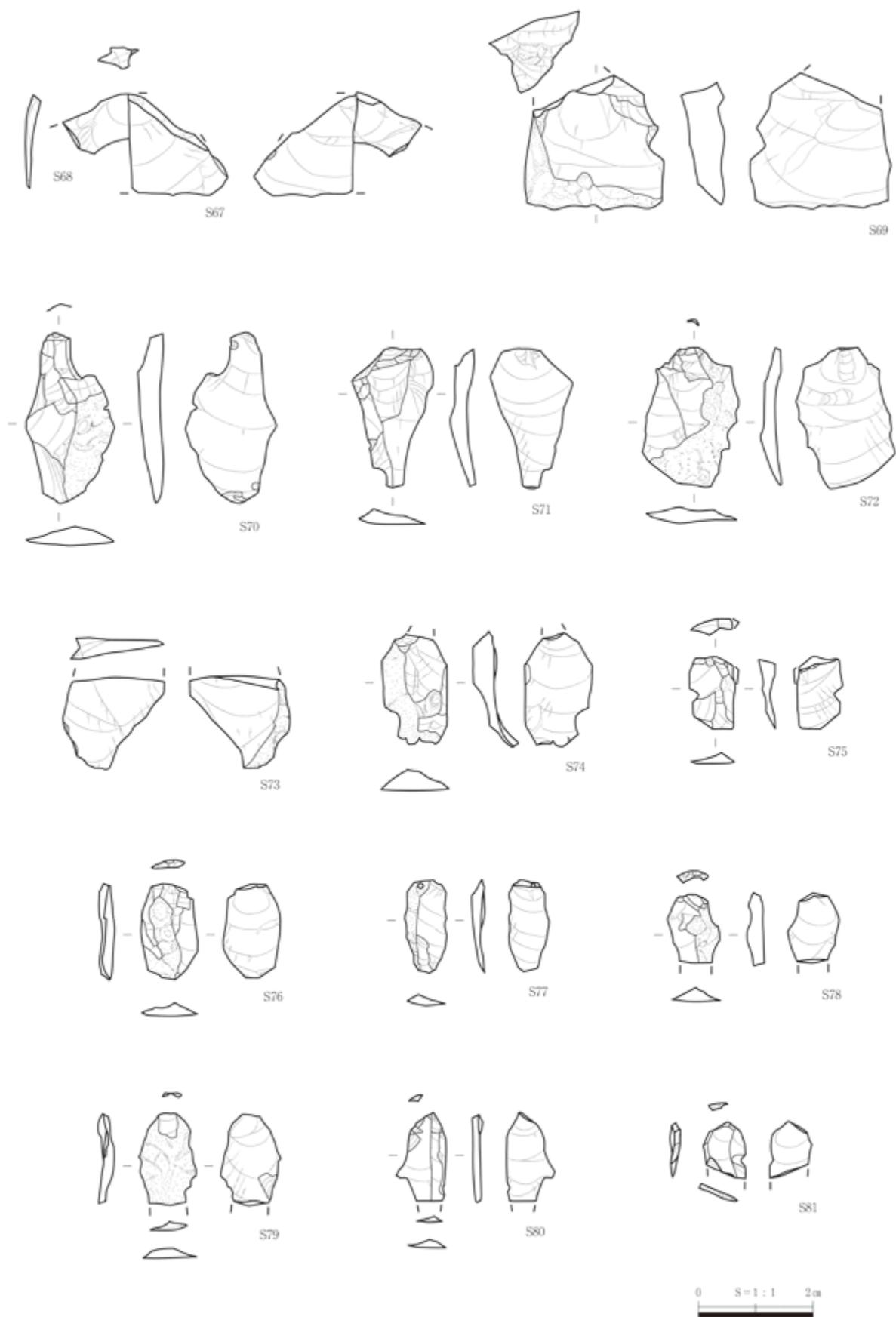
S65とS66は中央部の破片。微細剥離をもつ中央部片と比較して、不整形である。

剥片

第29図は剥片である。大きく2種類に分けることができる。

1種類目は大きめの不定形な剥片(S67～S73)。石核の形成や調整の作業で出た剥片と考えられる。S70～S72は比較的整った剥片で、S70とS72は、同一母岩に属する資料が他にない単独資料である。いずれも折られていない点が小石刃とは異なる。おそらく手を加えずに便宜的な作業にあてるために選ばれたのであろう。それ以外の4点は剥離時に折れている。すべて母岩1に属するが剥片どうしは接合しない。母岩1の剥離が遺跡内で行われ良好な剥片が搬出されたか、直前の経由地で作業されたものの中から比較的大きめの剥片を取り置いたかのいずれかと考えられる。

2種類目は小さ目の剥片で、側縁が概ね平行で、剥離軸と同じ方向の剥離面で背面が構成される特



第29図 上層出土剥片

徴から考えると、小石刃と同じ作業面から、石核調整の目的で取られたか、作業面を予定通りに取り込めなかった剥片と考えられる(S74～S81)。S45やS46のような寸詰まりの小石刃と同じように、折らずに使うために選ばれたものかもしれない。

どちらの種類剥片にも、連続する微細剥離をもつものは1点もない。これは、小石刃と剥片の扱いや使用における明確な区別を表していると考えられる。小石刃は管理的で特定の役割を担ったのに対し、剥片は便宜的で即時の用途に対応したものであろう。

(3) 石器の分布と遺跡の構造(第30・31図)

上述のように、上層の石器群は平面的には斜面地に広く分布し、垂直方向の分布幅も層をまたいで広い。出土状況が良好でない以上、石器の分布を分析することにあまり意味はないかもしれない。しかしながら、型式別および母岩別の分布をみると、ある程度の傾向が確認できる。なお、調査の初期段階で黒色土および漸移層中から出土した石器については、出土位置が記録されていないものが多く、記録があるのは46点中29点である。

型式別の分布(第30図)では、2つの点が目を引く。まず、微細剥離をもつ小石刃が北西の集中部にまとまることである。この中には全ての接合資料も含まれる。一方、南側の斜面部に分布するのは多くが廃物である。中でも、小石刃の末端片は、斜面の上方に目立つ。母岩別の分布(第31図)から認められる傾向は、母岩の数が多くかつそれぞれの母岩を構成する遺物が少ない本石器群においてはあまりない。しかし、単独の比較的大きな剥片として持ち込まれた母岩12と13が北西集中部に含まれていることは注目される。逆に点数が多く、廃物を多く含む母岩1と母岩2が南側斜面部に多いことは、この2つの母岩については、剥離作業がその付近で行われたことを示しているのかもしれない。

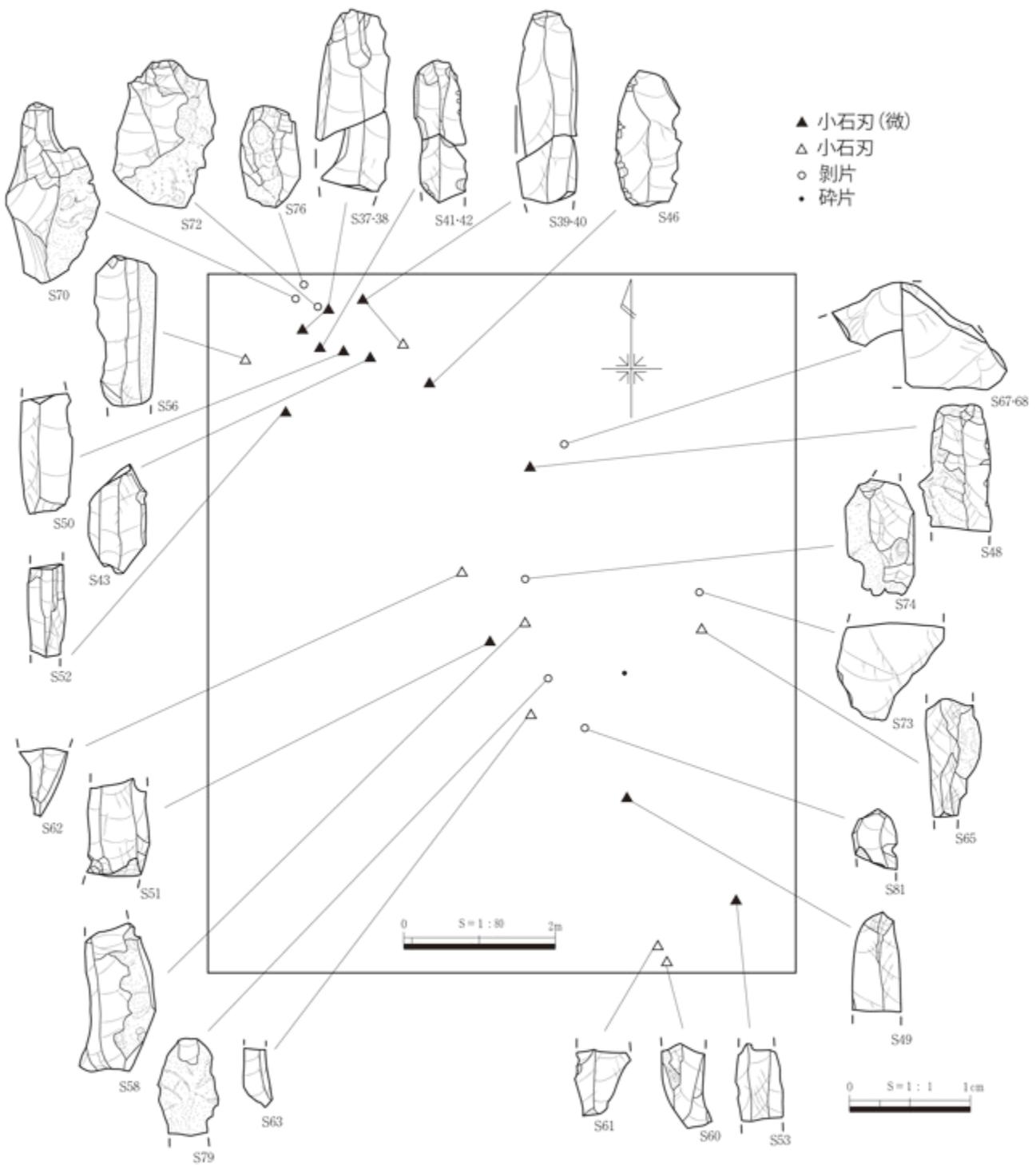
以上から、北西集中部が活動の中心部分であると考えられる。ここでは、石器の使用や交換などが主に行われていると推定される。一方、南側斜面部は少量の剥片剥離や、小石刃の折り取りや、廃棄にあてられた場所であると考えられる。理解に苦しむのはその特異な分布状況である。下の集中部から上に向かって投げ捨てたと考えるよりは、斜面上方のどこかで、あるいは斜面を転々としながら作業を行ったと考えるべきかもしれない。腰を落ち着いた通常の剥片剥離ではなく、貯めておいた小石刃を加工して石器を準備するという独特な消費のあり方がこのような分布につながった可能性がある。

(4) 考察

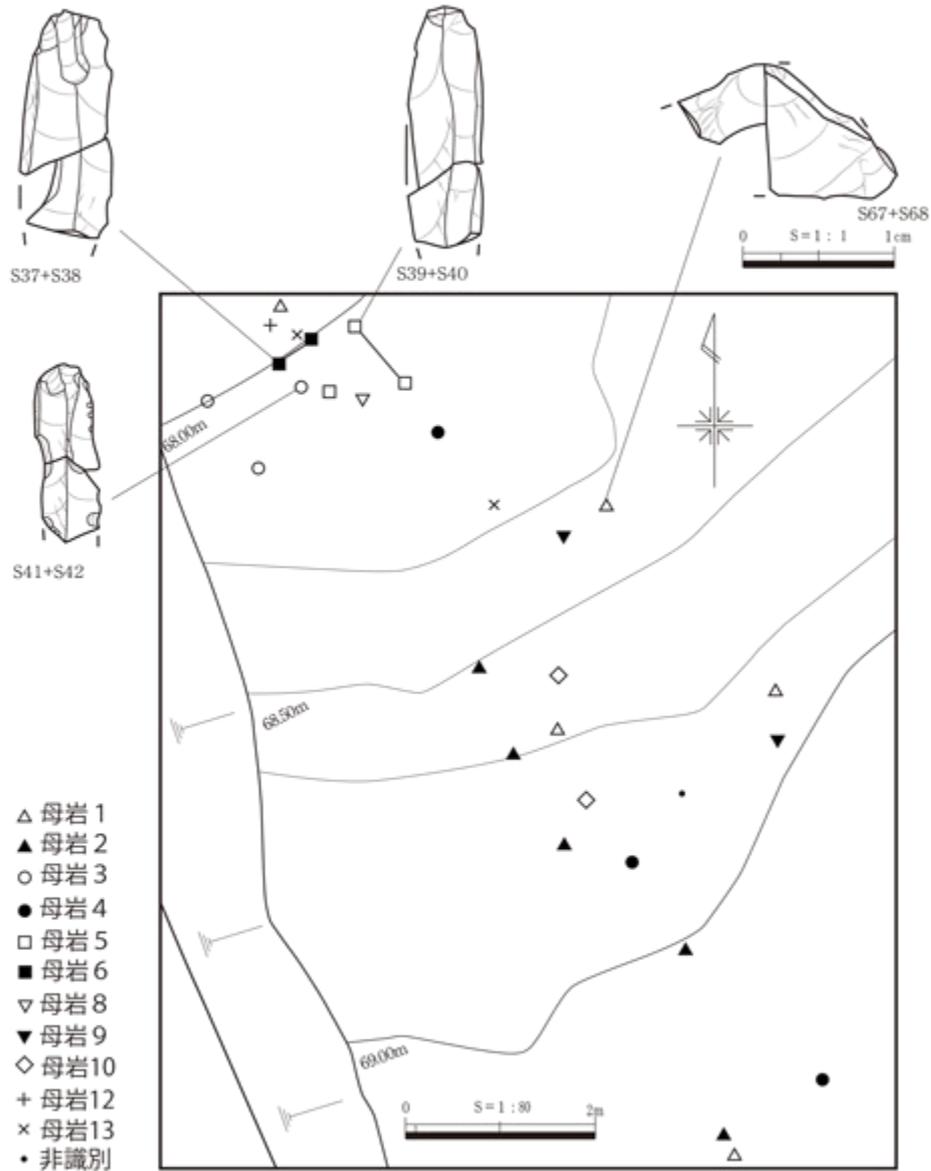
小石刃の剥離技術

上層から出土した小石刃のうち、打面部が残るものは10点、打瘤が観察できるものは13点ある。S47のように押圧剥離でよく見られる豆状の打瘤をもつものもあるが、ほとんどの資料は打瘤があまり発達せず打面と主剥離面との境がわずかに突出する。したがって、これらの小石刃は鹿角などの有機質ハンマーによる直接打撃によって剥離されていると推定される。

小石刃の剥離に際しての石核調整は打面を中心に行われ、入念である。打面は10点中9点とほぼすべてで細かな調整を加える。打面の一部をわずかに山形になるように整形して、ハンマーが当たる箇所を設けている例が多い。小さな石核から小石刃を連続剥離するには、打点のわずかなズレも致命傷となるおそれがある。打点を石核に予め作り出すことは、それを避けるための工夫であろう。頭部調整は、背面の稜線に沿って丁寧に残底を除去するものと、打面縁部付近から粗く残底を取るものが



第30図 上層型式別石器分布図



第31図 上層母岩別石器分布図

第3章 調査の成果

半々である。後者は石などで擦ったものであろう。このような小石刃の丁寧な調整は、剥片では調整打面の割合が低く、頭部調整が行われないものが多いのとは好対照である。

小石刃背面の稜数は1稜が15本、2稜が8本、3稜が4本と、1稜が主体で稜数が増えると半減してゆく。しかし、S37+S38やS39+S40、S47のような整った小石刃には2稜や3稜のものが多く、逆に長さが短く寸詰まりのものや背面に礫面を残すものに1稜のものが多いことには注意する必要がある。良好な小石刃に2稜以上のものが多いのは、幅がある程度確保できることに理由があるであろう。ことによると、安定した装着のために2稜のものを狙っている可能性もある。

小石刃の長さに関しては、ほとんどが折られているため正確な値は不明である。頭部と中央部の接合資料が約30mm、末端部が約15mmなので、本来は45mm程度の長さがあったと推定される。幅についての平均値は9.5mmであるが、8.0mm前後と10.5mm前後の2つにまとまり、後者がより多い。なお、幅7.0mm未満のものが1点もないことは重要である。通常、幅5.0mm前後のものが多いとされる細石刃とは、本文化層の資料が明らかに異なる点である。45mmという長さも、細石刃の場合には例外的な長さになるであろう。後期旧石器時代終末期の細石刃が一般に押圧剥離で取られていることを考え合わせると、この石器群は細石刃文化には属さない可能性が高い。

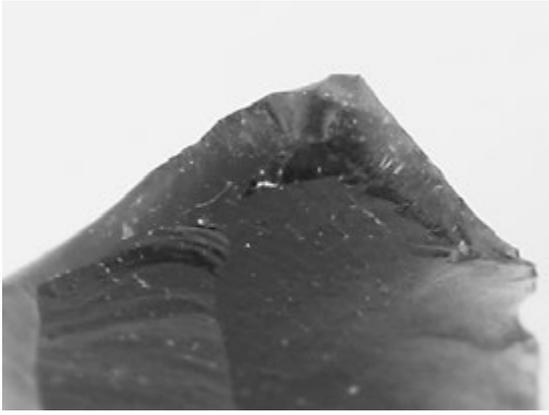
出土遺物の項目で述べたことと合わせると、小石刃の剥離作業は次のようにまとめられる。石核は円錐形で末端が急にすぼまる形態をしている。高さは45mmほどで、全周から小石刃を取る。ほぼ毎回打面調整によって打点を作り出すとともに頭部調整で残庇を除去しながら、有機質ハンマーによる直接打撃で小石刃を剥離する。小石刃は良好に剥離できた時は先細りになる。しかし、石核の形態に関連して、剥離が行き過ぎて石核末端部を取り込む事故が時々発生し、その度に石核は高さを減じ、したがって取られる小石刃も寸詰まりになってゆく。

小石刃の微細剥離

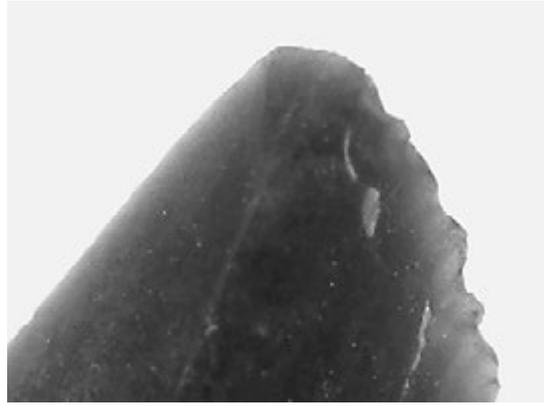
小石刃には、微細剥離をもつものが16点含まれる。その特徴から、使用方法をある程度推定できる。連続する微細剥離をもつものは、片縁が7点、両縁が2点である。部分的な微細剥離は個別に数えると、角上が10箇所、部分が2箇所である。

側縁の微細剥離は、刃縁の使用に関わるものと考えられる。両縁にもつ2点(S37・S50)は散発的な微細剥離であるのに対し、片縁の中にはS44～S46のような深度が大きく両面に及ぶものが含まれる。したがって、小石刃は片縁を使用することを基本とし、使用しないほうの縁は軸に埋め込まれたりして露出していないものと考えられる。

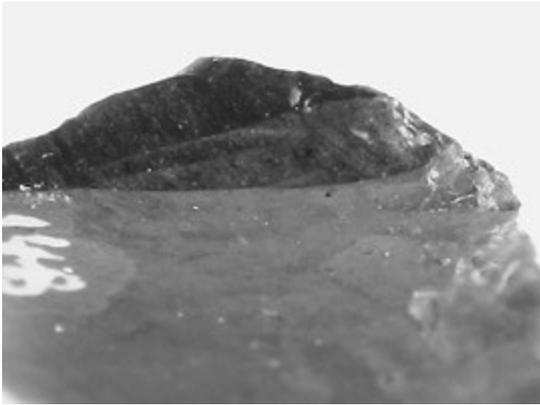
角上の微細剥離については、折れ面と側縁の角に微細剥離をもつものが半数の8本にあることが重要である。使用によるものか装着に関係するものかは、微細剥離の様態に手がかりがあるだろう。彫刀面状のもの6箇所、折れ面から背面への平坦剥離状のもの2箇所、通常の微細剥離2箇所が認められ、前2者は対象物との強い接触を示すと考えられる。特に、彫刀面状のものは小石刃への縦方向の負荷の結果による可能性が高く、軸や接着剤などとの接触によるものが含まれていると推定される。ところで、8本中7本は角上の微細剥離は1つの角にしかない。また、斜めに折られ平面が切出形を呈する小石刃の中で、短い方の側縁側のみに微細剥離をもつものはない。以上から、角上の微細剥離を装着に関係するものと捉えるならば、軸に彫った溝に長辺側を斜めに傾けて埋め込むような方法が、蓋然性が高い。



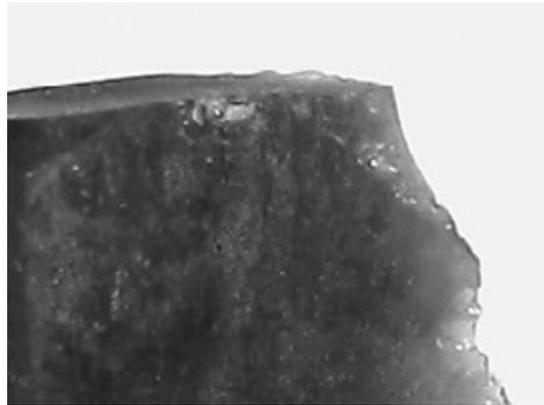
1 S43 先端



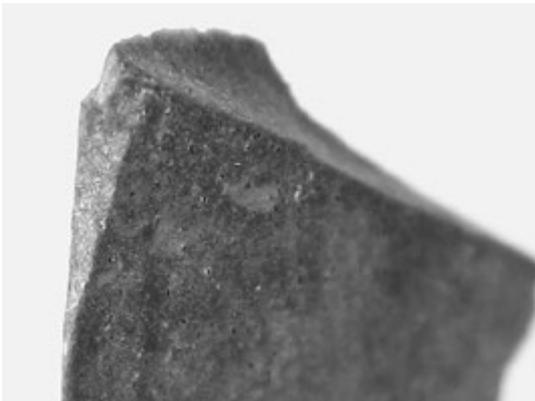
2 S44 先端



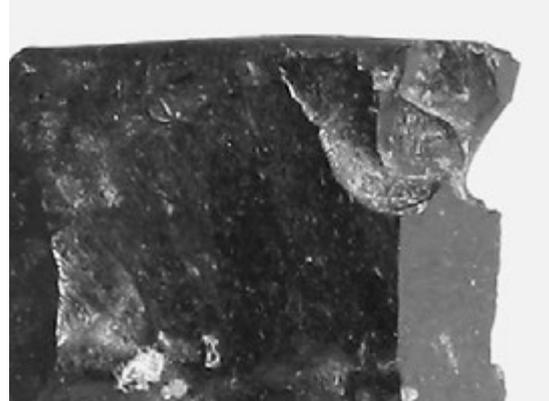
3 S44 右基部 (侵形)



4 S44 左基部 (平坦剥離)



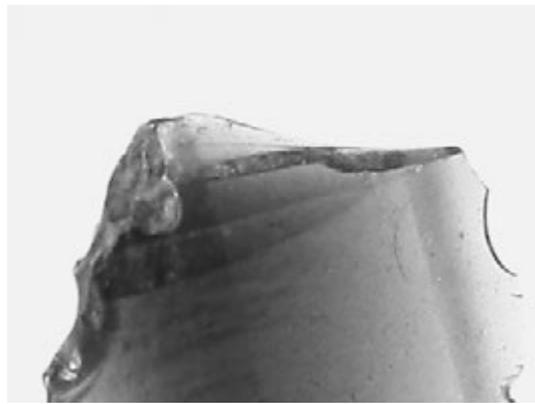
5 S40 角 (彫刀面状)



6 S51 角 (平坦剥離)



7 S50 角 (侵形)



8 S42 角 (侵形)

写真6 小石刃の微細剥離

第3章 調査の成果

S44は、下端の両角に微細剥離をもつ特殊な例である。長辺側には侵形、短辺側には平坦剥離状の微細剥離が見られる。長辺には両面に深く連続する微細剥離があつて折れ面と長辺がなす先端部にまで及ぶ。この状況からは、下端を埋め込んで長辺を用いる使用法が復元できる。斜めに折り取られた小石刃が、先端のピースとして扱われたケースである。

出土遺物の項目で述べたことと合わせると、小石刃の利用方法は次のように推定される。まず、屈曲が激しく側縁が平行でない末端部3分の1を折り取って捨てる。残りの3分の2はそのまま使うこともあるが、さらに3分の1を折り取る場合もある。こうしてできた小さい方の台形の破片は、組み合わせ道具の側縁のピースとする。うまく斜めに折り取ることができた場合には、長い方の破片を先端のピースとして用いる。石核が小さくなってから取られた寸詰まりの小石刃は、折り取ることなくそのまま用いられる。いずれも軸に埋め込んで用いられ、長辺側を斜めに傾けて嵌める場合が多い。

石材の管理

表6に母岩別の構成を掲げる。先述のように、少数の遺物からなる13もの母岩で構成される石器群であるため、これをもとに個人の行動などを復元することは難しい。しかし、最も数が多く遺跡内または直前の経由地で剥離作業が行われた可能性が高い母岩1と母岩2からは、石材の管理状況についての情報が得られる。

母岩1に属する9点の資料が2点の小石刃を含めてすべて礫面を付着させるのと対照的に、母岩2に属する9点には礫面をもつものは3点しかない。また、母岩2は1点の剥片を除いて、8点が小石刃か作業面から取られた剥片で構成される。つまり、母岩1の石核は小石刃剥離の初期段階にあるのに対し、母岩2の石核は作業のかなり進んだ状態にあったと考えられる。同様のことは、礫面をもつ資料を中心とする母岩3・9・10と、それ以外の母岩についても言えるかもしれない。もちろん、一般的には礫面の付着は原礫の形状や石核の面構成に左右されるものであるが、円錐形石核によつたと推定される本石器群の場合には、礫面の割合が石核の消費度を反映していると考えてよいだろう。

結論として、本石器群の割り手たちは、異なる消費度の石核を組み合わせて利用していると推定される。また、石核はある程度消費すると割り切らずに搬出したことが、母岩1から分かる。消費がかなり進んだ母岩2でも石核が残されていないので、直前の経由地で割り切られて棄てられたのでなければ、持ち出されているだろう。さらに、母岩2と3を除き、各母岩に含まれる小石刃の数が2本前後で平均していることは、複数の石核の平均的で計画的な消費を表現していると考えられる。あるいは、複数の個人が石核を少しずつ割って各人の軸に2本位ずつ小石刃を装着して持ってきたため、このような母岩別構成が生じたのかもしれない。いずれにせよ、一見ランダムに思える小石刃の寄せ集めが、実際には入念に計画されたものである可能性がある。

このような石材管理の背景には、下層の場合と同じく、黒曜石原産地である隠岐からの距離の問題があると考えられる。上層の割り手たちも下層の人々と同じように、複数の石核を少しずつ消費することで、石材が枯渇するリスクを回避した。異なる点は、下層では未発達な技術に基づき必要な量をその場で製作するのが精一杯だったのに対し、上層の人々は洗練された石刃技術を背景に、少し前の経由地で、少し未来の活動の分までを生産しているらしいことである。本石器群の資料は、主にその余剰の消費の回を示しているだろう。石器群が遺されたのが、丘陵上ではなく谷底のいわば道の上であることは、余剰が臨時の活動を想定して準備されたことを示唆していよう。おそらく次かその次の

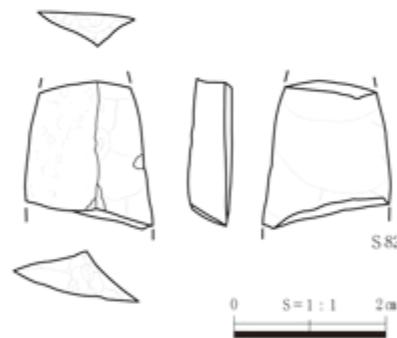
滞在地では、小石刃の生産と別の余剰の蓄積が行われたことであろう。

およそ2万年の時を隔てて同じ場所にたどり着いた2つの集団が、厳しい石材環境に適応するために石核の消費に関しては同様な行動を取りながら、技術の発達差を一因として効率と先見性の違いを示す様は、石器製作という一面に関することではあるが、人類の進歩を具体的に表現しているようで興味深い。

5 層位不明の旧石器時代遺物(第32図)

2つの石器群の検出場所から離れた所で、旧石器時代のものと考えられる遺物が単独で出土している。調査地南端の尾根上、J8グリッドの表土下から玉髄製石刃が1点出土した。風倒木痕の隣接地点であったので、下層からの巻き上げを想定して、周囲1グリッドについて白色ローム中までの精査を実施したが、他に遺物は出土しなかった。

S82は石刃の中央部破片で、赤色で良質な玉髄を原材に用いる。背面に礫面が残るので、礫を素材にして作業の比較的初期に剥がされたものと推定される。また、折れ面にハジケが認められることから、火を受けていると考えられる。本遺跡においては、下層は石刃をもたず、上層は小石刃のみの石器群である。また、ともに黒曜石を石材とする。したがって、いずれにも属さない可能性が高い。南方の調査地外に第3の文化層が存在するのかもしれない。



第32図 層位不明石器

表7 層位不明石器一覧表

掲載番号	地区	層位	遺物番号	挿図番号	PL番号	型式	部位	法量				備考
								長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	
S82	J8	表土下	164	32	40	石刃	中央部	18.9	16.5	5.6	1.83	玉髄製。被熱。

第3章 調査の成果

表8 上層石器一覧表

掲載番号	地区	層位	遺物番号	挿図番号	PL.	母岩	接合番号	型式	部位	法量(mm)			重量(g)	x座標	y座標	z座標	備考
										長	幅	厚					
S37	B3	ソフトローム	143	第27図	PL.41	6	1	小石刃(微)	p	21.7	11.6	2.5	0.63	-54289.283	-68792.104	68.058	接合長△29.4、幅12.1
S38	B3	漸移層	140	第27図	PL.41	6	2	小石刃(微)	m	13.2	10.0	2.3	0.27	-54289.062	-68791.755	68.119	
S39	B3	ソフトローム	136	第27図	PL.41	5	1	小石刃	p	24.2	9.5	2.4	0.55	-54289.482	-68790.775	68.170	接合長△31.9
S40	B3	ソフトローム	137	第27図	PL.41	5	2	小石刃(微)	m	10.9	△9.3	2.3	0.27	-54288.653	-68791.306	68.054	
S41	B3	黒～暗褐色土	408	第27図	PL.41	3	1	小石刃(微)	p	14.1	7.6	1.8	0.20				接合長△23.0
S42	B3	漸移層	141	第27図	PL.41	3	2	小石刃(微)	m	10.5	7.3	1.7	0.13	-54289.518	-68791.866	68.212	
S43	B3	ソフトローム	138	第27図	PL.41	8		小石刃(微)	p	17.8	9.3	2.1	0.31	-54289.648	-68791.221	68.007	
S44	B3	漸移層	148	第27図	PL.41	7		小石刃(微)	m	17.8	11.5	4.1	0.69	-54286.900	-68793.324	67.928	
S45	C3		119	第27図	PL.41	7		小石刃(微)	a	24.1	11.4	2.3	0.57				
S46	B4	ソフトローム	135	第27図	PL.41	4		小石刃(微)	a	22.0	10.9	2.5	0.52	-54290.014	-68790.440	68.220	
S47	B3	黒～暗褐色土	408	第27図	PL.41	4		小石刃(微)	pm	29.3	6.5	2.5	0.58				
S48	C4	漸移層	134	第27図	PL.41	9		小石刃(微)	pm	21.0	10.9	3.7	0.87	-54291.104	-68789.114	68.386	
S49	C3	漸移層	123	第27図	PL.41	2		小石刃(微)	p	16.5	8.0	2.6	0.29	-54295.489	-68787.826	69.474	
S50	B3	ソフトローム	139	第27図	PL.41	5		小石刃(微)	d	19.3	8.1	2.6	0.40	-54289.582	-68791.558	68.158	
S51	C3	漸移層	130	第27図	PL.41	2		小石刃(微)	m	15.8	10.0	1.9	0.38	-54293.436	-68789.648	69.043	
S52	B3	ソフトローム	147	第27図	PL.41	3		小石刃(微)	m	14.9	6.5	1.2	0.12	-54290.392	-68792.327	68.243	
S53	C3	漸移層	122	第27図	PL.41	4		小石刃(微)	m	12.4	7.0	1.4	0.17	-54296.874	-68786.384	69.540	
S54	C3		119	第28図	PL.41	11		小石刃	a	△22.3	8.4	2.4	0.39				
S55	C3		119	第28図	PL.41	2		小石刃	a	△22.3	9.1	2.5	0.59				
S56	B3	ソフトローム	146	第28図	PL.41	3		小石刃	pm	24.6	10.4	3.0	0.68	-54289.675	-68792.853	68.036	
S57	B3	黒～暗褐色土	408	第28図	PL.41	3		小石刃	pm	23.5	7.6	2.7	0.55				
S58	C3	漸移層	129	第28図	PL.41	1		小石刃	md	24.2	10.9	3.2	0.95	-54293.179	-68789.175	69.005	
S59	C3		119	第28図	PL.41	3		小石刃	md	22.6	10.5	3.7	0.71				
S60	C4	漸移層	149	第28図	PL.41	1		小石刃	d	14.6	7.7	4.2	0.31	-54297.666	-68787.309	69.630	
S61	C4	漸移層	121	第28図	PL.41	2		小石刃	d	10.8	8.5	1.8	0.11	-54297.447	-68787.428	69.658	
S62	B3	漸移層	132	第28図	PL.41	2		小石刃	d	11.3	7.5	1.3	0.09	-54292.497	-68790.077	68.798	
S63	C3	漸移層	127	第28図	PL.41	2		小石刃	d	9.8	4.1	0.9	0.02	-54294.401	-68789.103	69.191	
S64	B3	黒～暗褐色土	408	第28図	PL.41	8		小石刃	d	8.0	4.4	1.7	0.05				
S65	C3	漸移層	124	第28図	PL.41	9		小石刃	m	19.5	8.5	4.5	0.59	-54293.257	-68786.860	69.225	
S66	C3		119	第28図	PL.41	1		小石刃	m	13.5	11.6	2.1	0.28				
S67	B3	黒～暗褐色土	408	第29図	PL.41	1		横形剥片	r	16.1	17.1	2.9	0.58				
S68	C4	漸移層	133	第29図	PL.41	1		横形剥片	lp	10.8	11.9	3.2	0.24	-54290.795	-68788.675	68.649	
S69	B3	黒～暗褐色土	408	第29図	PL.41	1		剥片	md	23.8	24.6	9.9	4.12				
S70	B3	漸移層	145	第29図	PL.41	12		剥片	a	29.5	14.8	4.7	1.30	-54288.880	-68792.201	68.089	
S71	B3	黒～暗褐色土	408	第29図	PL.41	2		剥片	a	24.2	13.7	3.0	0.74				
S72	B3	ソフトローム	142	第29図	PL.41	13		剥片	a	24.4	15.9	3.0	1.07	-54288.976	-68791.906	67.994	
S73	C4	漸移層	151	第29図	PL.41	1		剥片	d	15.4	17.9	4.4	0.80	-54292.748	-68786.880	69.096	
S74	C3	漸移層	131	第29図	PL.41	10		剥片	md	19.3	11.2	4.5	0.85	-54292.581	-68789.170	68.930	
S75	B3	黒～暗褐色土	408	第29図	PL.41	3		剥片	a	12.3	8.1	3.2	0.19				
S76	B3	ソフトローム	144	第29図	PL.41	1		剥片	a	16.8	9.8	2.4	0.45	-54288.684	-68792.095	68.041	
S77	B3	黒～暗褐色土	408	第29図	PL.41	2		剥片	a	16.1	7.1	2.2	0.17				
S78	B3	黒～暗褐色土	408	第29図	PL.41	1		剥片	pm	△12.3	8.2	2.8	0.22				
S79	C3	漸移層	128	第29図	PL.41	10		剥片	pm	15.8	10.0	2.2	0.28	-54293.916	-68788.866	69.105	
S80	B3	黒～暗褐色土	408	第29図	PL.41	2		剥片	pm	14.7	8.0	1.6	0.13				
S81	C3	漸移層	126	第29図	PL.41	4		剥片	p	9.1	7.5	1.5	0.10	-54294.564	-68788.397	69.181	
	C3		125					碎片	d	6.3	5.2	1.6	0.04	-54293.881	-68787.853	69.176	

凡例

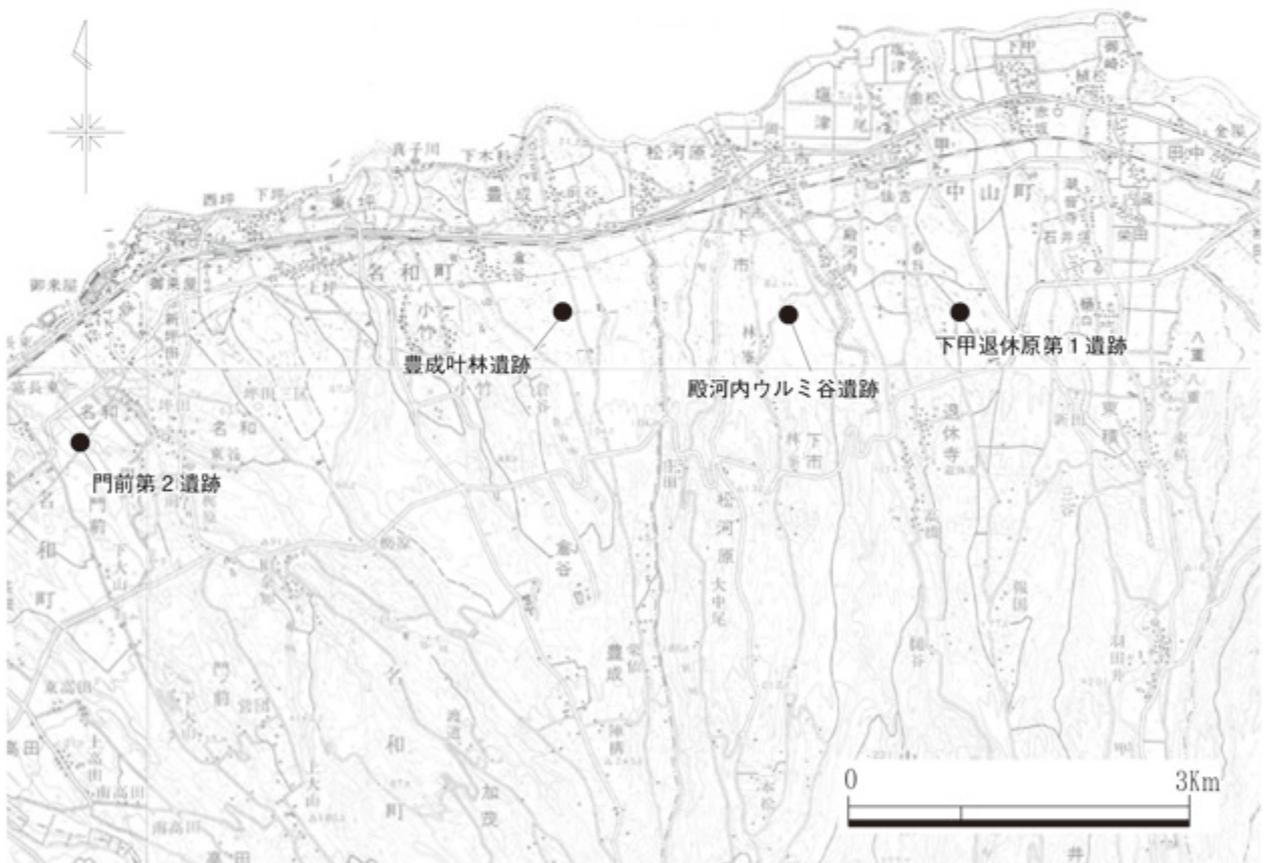
型式 小石刃(微) : 微細剥離ある小石刃

部位 a:完全 p:打面部片 m:中央部片 d:末端部片 r:右片 l:左片

6 大山北麓における旧石器編年

本遺跡は県内で最初の旧石器時代の重層遺跡である。10年前まで鳥取県には発掘調査で確認できた確実な旧石器時代遺跡はなく、旧石器研究は、本来所属した層から遊離して散発的に発見される石器に基づいていた。しかし、国道9号改築にともなう発掘調査の継続実施により、近年、大山北麓地域では旧石器時代遺跡の発見が相次いでいる。そのいずれもが、火山灰との関係が捉えられ、個性的な石器群をもつ。他地域に類例が乏しい石器群も発見されている。いまだ該当する遺跡が欠落する時期はあるものの、当地域での高速道路事業の完成により発掘調査が一段落を迎えた現時点で、大山北麓における旧石器編年を試みたい(第34図)。

ここで主に取り上げる遺跡は、層位的な対比と旧石器としての確実性を重視して、大山北麓に位置し、ローム層中からの出土が確認されているものに限る。年代順に、下甲退休原第1遺跡下層、豊成叶林遺跡、門前第2遺跡、殿河内ウルミ谷遺跡、下甲退休原第1遺跡上層の4遺跡5石器群である。すべてが西伯郡大山町に所在する(第33図)。



第33図 旧石器時代遺跡分布図

第3章 調査の成果

I 期

台形石器の時期。

下甲退休原第1遺跡下層でAT下約5cmの白色ローム中からブロックが3箇所検出され、台形石器と剥片が出土した。台形石器は、縦形の剥片(折れている)を素材に3辺を整えるものと両ポジの剥片を素材に基部が尖るものがあり、ともに平坦調整は施さないので、古い形態に属すると思われる。剥片剥離技術は、直方体石核の縁を中心に断面直角三角形の剥片を剥ぐものと、剥片を素材に両ポジの剥片を剥ぐもの、両者の折衷の3種類が復元される。打面調整等の石核調整をほとんど行わない、比較的単純な技術である。数個の石核から数枚ずつの剥片を取るだけの限定的な石材消費形態を見せる。石材はほぼ黒曜石のみを用い、1点だけ石英の剥片が含まれる。

II 期

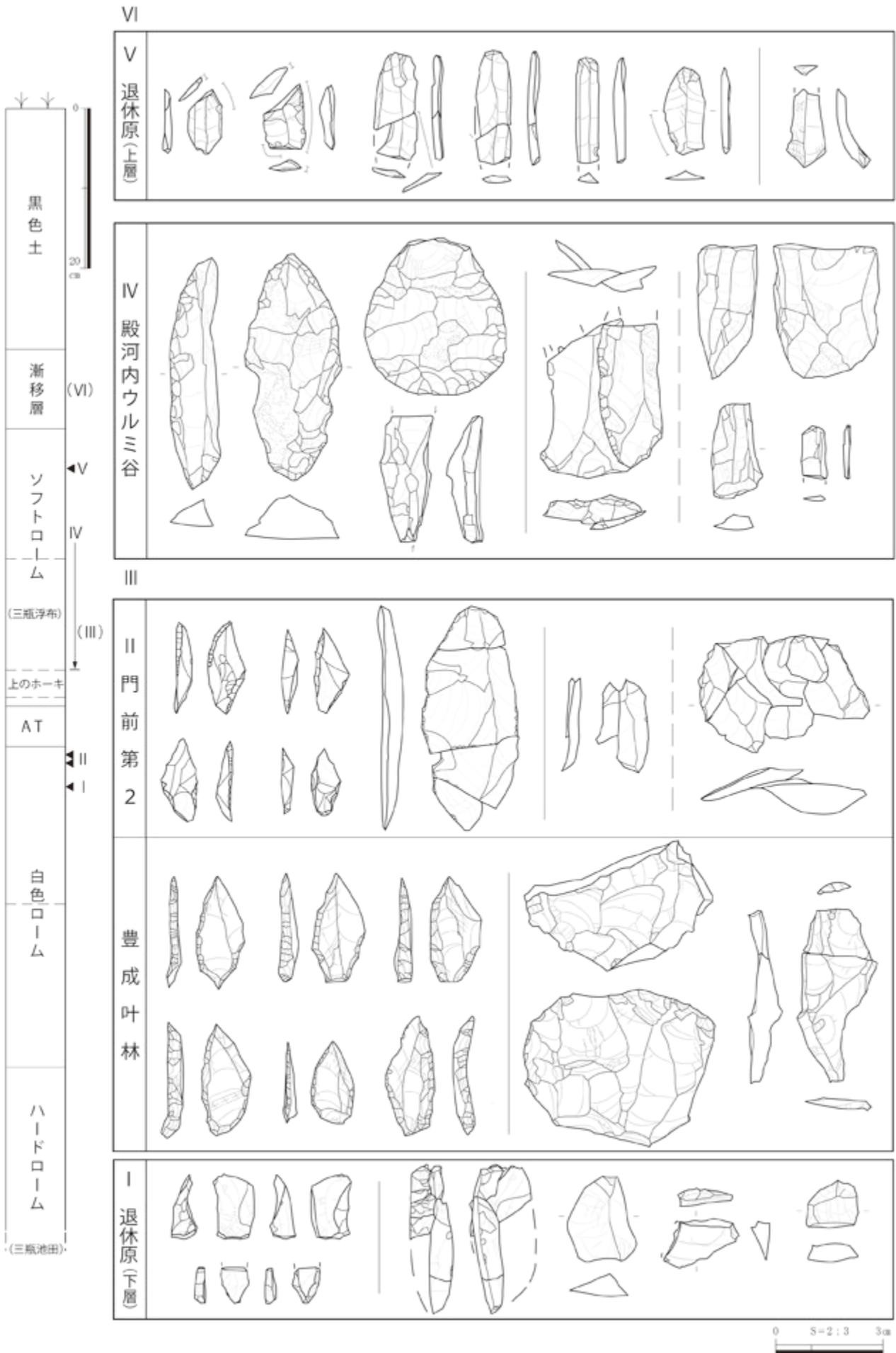
ナイフ形石器文化期の前半期。豊成叶林遺跡では放射性炭素年代測定により暦年較正年代で30000年前頃の結果が出ている。

豊成叶林遺跡と門前第2遺跡が該当する。ともにAT下1～2cmの白色ローム中から石器が出土したが、層準および放射性炭素年代から前者が少し古いと考えられる。

豊成叶林遺跡では2つのブロックが良好な状態で検出された。1点のナイフ形石器が黒曜石製である他はすべて玉髓を石材に用いる。11点あるナイフ形石器は主に石刃を素材とし、2側縁加工を基本とする。裏面調整は施さない。うち6点は同じ母岩に属し同一人物によって作られたと考えられるが、素材の使い方や細部の形態は変異に富む。剥片剥離技術は石刃技術で、打面と作業面の転移を繰り返すものである。接合資料の読み取りから、作業の結果や剥離事故が転移の契機であり、最も成功した部分では、石核の角付近を作業面にして対向する副打面からの剥離で作業面を修正しながら石刃が連続剥離されている。打面調整・頭部調整・稜上調整など一通りの石核調整技術を保持するものの、石核を前形成して石刃を単一作業面から連続剥離する手法は確認できない。

門前第2遺跡では試掘調査のみが行われており、ブロックの一部が検出されている。石材はすべて黒曜石である。ナイフ形石器は、小石刃や剥片を素材にしたいずれも長さ2.5cm前後の小さなもので、2側縁加工が中心だが、素材の小ささもあって二次加工の程度は軽い。長さ5cm程度の石刃も存在し礫面をもつものが多いが、小石刃に先立って取られたものと考えするには大きさや形態の差が大きすぎる。石核はなく、接合資料から復元される剥片剥離技術は2種類ある。1つ目は、小石刃の剥離を目的としたもので、末端が急に屈曲して尖る小石刃の形態から、円錐形石核であると推定される。入念な打面調整を施し主に1稜の小石刃を取るものである。2つ目は円盤状石核によるもので、打面縁部を激しく擦った後に接線打撃で厚い打面部をもつ剥片を取るという、独特の技術である。剥片には二次加工を施すものがあり、やはりナイフ形石器の素材を目的としていると考えられる。

この2遺跡の比較から、ナイフ形石器が小型化してゆくことを想定するのは、2遺跡の時間差がそれほど大きくないことを考えると、正しい理解ではないように思われる。豊成叶林遺跡では、より近距離の石材である玉髓を組み込んで、黒曜石からも玉髓からも同じ大きさの石器を作る。門前第2遺跡にも接合資料から見て豊成叶林遺跡に劣らない大きさの石核はあったはずであるが、黒曜石だけを用いて、ナイフ形石器のみを小さく作る。石器の大きさの差は、集団の好みや石材環境への適応戦略の違いなどを表すものと考えたい。



第34図 大山北麓における旧石器編年

Ⅲ期

ナイフ形石器文化期の後半期。

該当する石器群は見つかっていない。周辺地域では、米子市の諏訪西山ノ後遺跡でローム層などから2点のナイフ形石器が出土している。大山町名和小谷遺跡から見つかった翼状剥片を素材にした黒曜石製ナイフ形石器もこの時期のものかもしれない。

Ⅳ期

石刃素材の周辺加工尖頭器と小石刃が複合する時期。

殿河内ウルミ谷遺跡で、上のホーキ火山灰が二次堆積した層から検出された。したがって、上のホーキよりも新しいことは確かであるが、正確な年代は不明である。Ⅴ期と比較すると、石刃を持つことなどから先行するものと判断される。

石器は、周辺加工尖頭器、厚形削器(角錐状石器)、搔器、彫器などで組成され、周辺地域でも珍しい型式のものを含む。石材原産地から離れた当地域では珍しく、比較的大型の石器を基本とする。周辺加工尖頭器は、石刃を素材に角度の浅い二次加工で周辺を整形したもので、両面調整は行わない。背を付けず鋭い刃縁を残さないことからもはやナイフ形石器とは呼べない。剥片剥離技術は2種類ある。1つ目は周辺加工尖頭器の素材を取るための石刃技術である。縁付きの石核を用い、1面の作業面を中心に、対向する2打面から幅が広く薄い石刃を取る、ルヴァロワ石刃石核に類似した技術が接合資料から復元される。もう1つは、小石刃の剥離で、板状や楔形の石核を前形成した上でその小口から数枚の小石刃を取る生産性の低いものが中心とみられる。しかし、舳先形の見事な母型や円筒形か円錐形石核の打面再生剥片も出土しており、生産性の高い高度な技術も存在する。石材としては、黒曜石を中心に用いるが、玉髓・サヌカイト・珪岩をも利用する。大型の石器を製作するためにさまざまな石材を利用し、それゆえ他地域とも多く関わりをもった可能性がある。

もはやナイフ形石器の製作は行わないものの、周辺加工尖頭器の形態やその素材となる石刃の剥離技術に、ナイフ形石器文化的な様相を強く残す。彫器など他の石器にも古い伝統が残っている。したがって、ナイフ形石器の消滅直後の石器群である可能性が高い。その一方で、小石刃の生産が行われる点は、次の時期につながる要素として注目される。殿河内ウルミ谷遺跡では、小石刃の生産は補助的で便宜的な性格が強いと評価されるが、これが主体的で管理的な小(細)石刃文化の起源になったという仮説を考える。周辺地域に比較対象を求めると、鳥根県原田遺跡Ⅳ層の石器群が挙げられる。三瓶浮布軽石の上から出土した石器群は、切出形の小型ナイフ形石器を含むことから、本石器群とは逆にナイフ形石器の消滅直前のものとされる。しかし、原田遺跡Ⅳ層は、削器などに両面調整が顕著に認められる点で、本石器群より新しいと考えることもできる。この時期の石器群の様相は複雑であるかもしれない。

Ⅴ期

折り取って使う小石刃のみの時期。

下甲退休原第1遺跡上層で、ソフトローム最上部を中心に検出された。三瓶浮布テフラよりは後の石器群である。

定型的な石器をもたず、30点の小石刃で組成される。小石刃は全長およそ45mm、幅8.0~10.5mmで、

屈曲した末端部を除去した後、そのまま用いるものと、不均等に2分して両方を用いるものがある。1つの角上に微細剥離をもつものが多いことから、軸に斜めに嵌めたものと推定される。斜めに折り取られたものは先端のピースとして用いられた可能性がある。剥片剥離技術は、押圧ではなく有機質ハンマーの直接打撃によっている。円錐形石核に入念な打面調整と頭部調整を施し、整った1～3稜の小石刃を剥ぎ取る。石材はすべて黒曜石である。

折り取って用いる点は細石刃石器群と共通するが、サイズは大きく、まだ押圧を知らない。細石刃文化に先立って、このような祖型となる文化が存在した可能性を指摘したい。IV期と合わせて考えることで、ナイフ形石器文化の消滅から細石刃文化の出現までの過程を明らかにできるかもしれない。

VI期

細石刃文化期。

該当する石器群は発見されていない。

以上の編年から、当地域の石器群には時期を越えた特徴をいくつか指摘できる。

1つ目は、黒曜石に対する依存度の高さである。黒曜石原産地である隠岐への距離は約90kmあるのに対し、玉髓原産地である花仙山へは約50kmである。しかし、多くの石器群ではほぼ黒曜石のみを石材として利用する。豊成叶林遺跡では玉髓を用いるが、当地域では例外的な存在であり、また先立って作られた黒曜石製ナイフ形石器を保有していることから、隠岐を含んだ遊動経路の中にあることは疑いない。玉髓と比較して均質ではるかに剥離作業が容易であることと、大山北麓からは古隠岐平原を挟んで一望できる原産地の地理的な分かりやすさが、黒曜石へのこだわりをもたらしたと考えられる。

2つ目は、石器の小ささである。多くの石器が2～4cmの範囲に収まる。ほぼ単一の供給源であった黒曜石原産地から距離があることが主な要因であろう。ナイフ形石器の小型化が顕著な門前第2遺跡を例にとれば、約90kmという距離は、単一の原産地に頼るには限界に近いものなのかもしれない。その中で異質な殿河内ウルミ谷遺跡の大型の石器類は、複数種類の石材を利用することと合わせて、外来的な要素をもつ可能性がある。

3つ目は、石器群の多様性である。時期によって内容が大きく異なるだけでなく、ほぼ同時期の石器群にも違いがある。容易に補充できない黒曜石をいかに効率よく消費してもたせるかという共通の命題に対する、技術や消費形態や遊動パターンの差などに基づく、時期あるいは集団ごとの解答の差が表現されていると評価される。

4つ目は、遺跡の小ささである。ここで取り上げた遺跡はすべて1～3ブロックしかないスポット的な小遺跡である。大遺跡どころか他地域のような通常サイズの遺跡でさえいまだ発見されていない。その理由の1つとして、地形の等質性が挙げられる。平坦でなだらかな大山山麓の丘陵地が見渡す限り広がり、それを河川が等間隔に近いような配置でほぼ直線的に下刻する景観は、特定の地点を繰り返し訪れるようなこだわりをあまり必要としなかったのであろう。スポット的な遺跡が中心であることは、石器群を雑音無く把握できる点では大きな利点でもある。もちろん、集団は他の集団との接触なしには維持できないのであるから、必ずどこかに複数集団が離合集散した痕跡は遺されているはずで、今後の発見に期待したい。

第3章 調査の成果

5つ目は、石器群の独自性である。特に、Ⅳ期の周辺加工尖頭器と結びついた特殊な石刃技術と小石刃技術が複合した石器群と、Ⅴ期の斜めに折り取って用いる非押圧の小石刃石器群は、他にほとんど類例をみない。これらがローカルな石器群であるか、列島の広がりを見せるものであるかは重要な課題になるだろう。これまでに報告されている資料の再検討が求められる。この時期以降、多くの地域ではロームの堆積が薄く、資料の混在が指摘される。一方、当地域では複数の火山灰を挟みながら良好な堆積が認められる地点が少なくない。大山北麓地域は、ナイフ形石器文化の消滅から細石刃文化の出現までの過程を明らかにできる可能性をもつ地域でもある。

【引用・参考文献】

名和町教育委員会 2005『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町文化財発掘調査報告書34集

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008『原田遺跡(4)』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12

鳥取県埋蔵文化財センター 2013『倉谷西中田遺跡Ⅱ 倉谷荒田遺跡Ⅱ 豊成叶林遺跡 豊成上神原遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書51

鳥取県埋蔵文化財センター 2014『殿河内ウルミ谷遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書57